

令和6・7年度

東京都教育委員会 授業改善推進拠点校

八王子市教育委員会 研究奨励校

研究紀要

【研究主題】

『生徒一人一人が自分の考えをもてる授業づくり』

—「主体的に学びに向かう力」を伸ばす授業改善—



令和8年2月20日

八王子市立上柚木中学校

目次

P. 1	八王子市教育委員会 挨拶 / 校長 挨拶
P. 2-4	研究の歩み
P. 5-9	研究概要
P. 10	研究構想図
P. 11	意識調査
P. 12-13	研究の特徴①授業デザイン
P. 14-17	研究の特徴②自主学習を促す仕組みづくり
P. 18-19	研究の特徴③WEBQU を使った学習席の作成
P. 20	研究の特徴④上柚木学習スタンダードの共有
P. 21-23	成果と課題—2年間の変容—
P. 24-28	学習の工夫に対する意識
P. 29-33	アウトプットに対する意識
P. 34-35	国調査 その他の項目から
P. 36-37	学力という側面からみた変容
P. 38	講師の先生方 / 研究に携わった教職員

八王子市立上柚木中学校 令和6・7年度 授業改善推進拠点校事業 研究構想図

東京都教育委員会 授業改善推進拠点校事業 目的
都内全小・中学校等に対して、「主体的に学習に取り組む態度」を養うための具体的な実践事例や評価方法を提供し、授業改善、評価方法の充実に資する。

学校の教育目標を達成するための基本方針
21世紀型能力といわれている基礎力・思考力・実践力などを高める指導を重点に。
①「何を学んだか」「何が分かったか」を毎時間生徒自身に確認させる時間を設定する。
②言語活動を重視した指導を展開する。
③家庭学習の習慣を定着させ、自ら学ぶ姿勢を育てる。

そのために①【実態把握】
以下の調査結果等に関連付け実態を把握する。
①「学びに向かう力等に関する意識調査」(東京都教育委員会提供)

そのために②【課題解決手段】
デジタル教科書、デジタル教材及び学習支援ソフト等を活用する。

本校独自に加えた調査
③「八王子市学力定着度調査」
④WEBQU

すでに取り入れているICTの活用
①Google クラウドの活用
フォームを使ったドリル・テスト
②ミライシード
③eライブラリアドバンス

肯定的回答が低かった数値(都調査から)
4(1) 確実にできるようになるまで、くり返し練習している。(肯:61.8% 否:38.2%)
4(2) 難しいと感じる問題でも、最後まであきらめずに取り組んでいる。(肯:60.9% 否:39.1%)
4(5) どうやったらうまくいくかを考えてから学習を始めるようにしている。(肯:60.9% 否:39.1%)
4(7) 学習をしてもできるようにならないときは、学習の方法を工夫している。(肯:63.6% 否:36.4%)
4(11) 自分が考えたことを、積極的に他の人や先生に伝えようとしている。(肯:52.7% 否:47.3%)

本校の課題(生徒) * ()内は特に課題となった調査項目
①粘り強さが無い(難しいと感じる問題でも、最後まであきらめずに取り組んでいる。)
②学習の工夫ができない(学習をしてもできるようにならないときは、学習の方法を工夫している。)
③アウトプットが苦手(自分が考えたことを、積極的に他の人や先生に伝えようとしている。)

仮説
積極的に自分の考えを他の人や先生に伝えるようになるために、粘り強く取り組み、いろいろな学習の方法を使うようになるのではないか。

研究主題 生徒一人一人が自分の考えをもてる授業づくり

【知識・技能】教える部分
「考えさせる授業」で使う知識が「分かる」「できる」「使える」ようにする。
理解するための
選択肢の提示

【思考・判断・表現】考えさせる部分
自分の考えをもつ(個)→協働的な場面で考えを共有する(集団)→もう一度自分で考える(個)
考えをもつための
選択肢の提示

考える過程で教科の魅力に気付く・面白さに気付く
もっと知りたい
考えたい(主体性)が生まれる

授業

そのために【方法①】考えさせる発問の設定
・考える過程で、教科の魅力に触れられる、気付ける発問を意識する。

そのために【方法②】個→集団→個の活動の設定
・個人で考えをもつ→集団で考えたことを共有する→深まったこと、広がったことを個人でまとめ直す、という流れを設定する。

そのために【方法③】考えるための選択肢の提示
・自分の考えがもてない生徒のために、考える視点や調べ方の選択肢を提示する。

自主学习

そのために【方法④】※主にC・D層
分かったこと・分からなかったことの確認
・自ら「分からない」ことを把握させる。
・分からないことを分かるようにし、「考えさせる場面」に参加できるようにする。
・自分の考えをもてなかった、説明できなかったときの手だて

そのために【方法⑤】※主にA・B層
「もっと知りたい」に配慮する場・機会の設定
・「もっと知りたい」という意欲が生まれた生徒に、どのような学びを提供するか。

「学びに向かう力等に関する意識調査」(児童・生徒調査) 調査項目一覧

1	各教科の授業の内容に対する理解の程度
(1)	国語の授業の内容はどのくらい分かりますか。
(2)	社会の授業の内容はどのくらい分かりますか。
(3)	算数(数学)の授業の内容はどのくらい分かりますか。
(4)	理科の授業の内容はどのくらい分かりますか。
(5)	英語の授業の内容はどのくらい分かりますか。*
2	各教科の学習を得意と感じる意欲の程度
(1)	国語の学習はどのくらい得意ですか。
(2)	社会の学習はどのくらい得意ですか。
(3)	算数(数学)の学習はどのくらい得意ですか。
(4)	理科の学習はどのくらい得意ですか。
(5)	英語の学習はどのくらい得意ですか。*
3	学習の動機
(1)	分かることややることが楽しいから。
(2)	しつかり考えられるようになりたいから。
(3)	将来の仕事や生活に役立つから。
(4)	友達や先生と学習するのが楽しいから。
(5)	学校の学習で人に負けたくないから。
(6)	先生や家の人にほめられたり、ごほうびをもらえたりするから。
4	学習の進め方(教科共通)
(1)	確実に行えるようになるまで、くり返し練習している。
(2)	難しいと感じる問題でも、最後まであきらめずに取り組みんでいる。
(3)	分からないことがあっても、学習を続けるようにしている。
(4)	集中して学習に取り組んでいる。
(5)	どうやらうまくいくかを考えてから学習を始めるようにしている。
(6)	学習の途中で、分からないところやできないところはどこかを考えている。
(7)	学習をしてもできるようにならないときは、学習の方法を工夫している。
(8)	テストでまちがえたときは、なぜまちがえたのかを考えている。
(9)	他の人と意見が合ったときは、質問をして相手の考えを確かめている。
(10)	分からないときは、他の人や先生に質問して解決している。
(11)	自分が考えたことを、積極的に他の人や先生に伝えようとしている。
(12)	他の人と相談して、考えを深めるようにしている。
(13)	学習していて分からない言葉があれば、すぐに調べようとしている。
(14)	どうしてそうなるのかという理由を考えながら学習している。
(15)	答えだけではなく、考え方も確かめながら学習している。
(16)	大切な言葉や公式などは、意味を理解して覚えるよ

1 理解度
2 得意度
3 関与的動機
4 分體的動機
5 粘り強さ
6 自己調整
7 対話性
8 深い理解

5	学習の進め方(国語(漢字))
(1)	漢字を何度もくり返し書いて覚えている。
(2)	漢字の部首の意味も考えながら覚えている。
(3)	似た意味や反対の意味の漢字、使われている熟語などを確かめながら覚えている。
(4)	テストやドリルでまちがえたときは、まちがえた漢字を選んで、特に練習している。
(5)	テストで漢字を書きまちがえたときは、どこをまちがえたのかを確かめている。
6	学習の進め方(国語(話すこと・聞くこと、書くこと)、読むこと)
(1)	発表や話し合いのときは、話す内容や順序を考えてから話している。
(2)	他の人の話を聞くときは、メモを取って理解するようになっている。
(3)	自分が書いた文章を読み返し、分かりやすい表現になっているように書き直している。
(4)	他の人が書いた文章のよい点を取り入れて書くようにしている。
(5)	文章を理解できるように、大切だと思った部分や疑問に思った部分に線を引ながら読んでいます。
(6)	文章を読んで理解したことや考えたことなどを他の人に説明している。
7	学習の進め方(算数・数学(計算問題))
(1)	答えだけではなく、途中の計算も書いています。
(2)	簡単に計算することができないかを考えてから計算している。
(3)	まちがえた計算問題は、どこでまちがえたのかを考えている。
(4)	テストやドリルでまちがえたときは、似た問題を選んで、特に練習している。
8	学習の進め方(算数・数学(用語・公式))
(1)	算数(数学)で学習する言葉や公式は、見ないでも言えるようにしている。
(2)	算数(数学)で学習した言葉の意味を理解しようとしている。
(3)	算数(数学)で学習した言葉を使って自分の考え方を説明している。
9	学習の進め方(算数・数学(文章問題))
(1)	前に同じような問題をやったことがあるかや、今まで学習した問題とどこがちがうのかを考えている。
(2)	分かっていないことと求めることを考えて問題に取り組んでいる。
(3)	問題文の内容を図や表、グラフに表して考えている。
(4)	式と答えだけではなく、途中の計算も書いています。
(5)	まちがえた文章問題は、どこでまちがえたのかを考えている。

9 漢字学習
10 話す・聞く・書く・読む
11 計算学習
12 用語や公式
13 文章問題

10	学習習慣(学習塾や家庭教師による学習を含めない)
(1)	学校以外で、月曜日から金曜日まで、毎日おおよそどのくらいの時間、学習をしますか。(学習塾や家庭教師による学習、習い事の時間は含めません。)
(2)	自分で計画を立てて学習している。
(3)	教科書を読むなどして、授業でこれから学習することの共通しをもつようにしている。
(4)	教科書やノートを読み返すなどして、授業で学習したことを振り返るようにしている。
(5)	教科書やドリルの問題に取り組むなどして、学習したことを確実にできるようにしている。
(6)	授業で学習した内容について、疑問に思ったことや興味をもったことを調べるようにしている。
11	学習習慣(学習塾や家庭教師による学習)
(1)	学習塾や家庭教師による学習の時間は、1週間の合計で、おおよそどのくらいですか。(習い事の時間は含めません。)
12	学習指導の工夫
(1)	授業では、問題や活動に取り組むで「できた」「分かった」と感じる人が多いと思う。
(2)	授業では、前の時間までに学習した内容と結び付けで考える時間があると思う。
(3)	授業では、他の教科の授業で学習した内容を生かして考える時間があると思う。
(4)	授業では、自分が理解したことや考えたことを解決する活動を行っていると思う。
(5)	授業では、他の人と考えを交流しながら課題を解決する活動を行っていると思う。
(6)	授業では、学習した内容をどのように振り返ったらいいかを、教えてもらっていると思う。
13	習熟度別指導(算数・数学)及び少人数・習熟度別指導(英語)
(1)	自分の学力に応じたコースに分かれて、算数(数学)や英語)の授業を受けることについて、どのように思いますか。
(2)	自分の学力に応じたコースに分かれて、算数(数学)や英語)の授業を受けることで、よく分かるようになると思いますか。

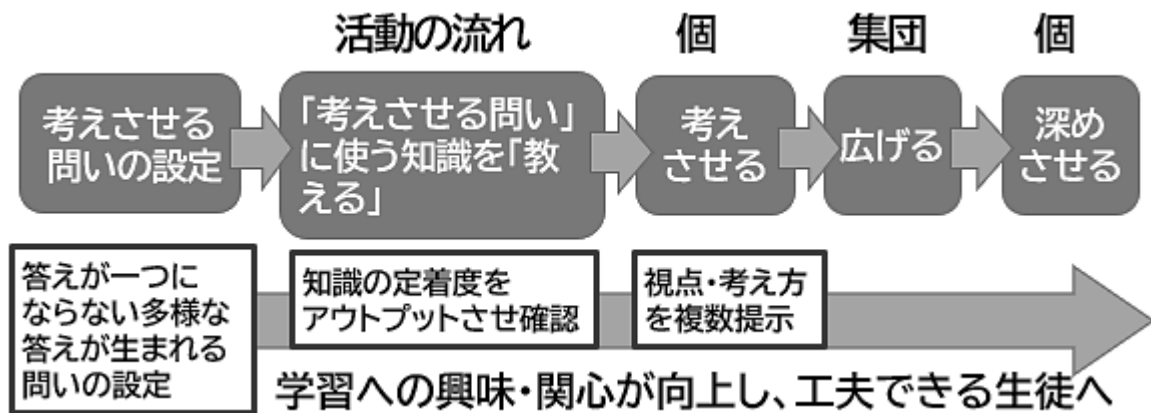
17 家庭での学習時間
14 家庭での学習
18 塾・家庭教師の時間
15 教師の指導
16 習熟度別指導

*印は、生徒調査(中学校)のみが回答する項目

研究の特徴① 全教科共通の授業デザイン

1. 全教科共通の授業デザイン

次のような全教科共通の授業デザインを構築し、「自分の考えをもつ」ことをゴールとした授業を実践した。



考えさせる 問いの設定

本研究は、「生徒一人一人が自分の考えをもてる」ようになることを求めている。そのために「答えが一つにならない多様な答えが生まれる問い」をいかに設定するかが単元の核となる。すぐに考えがもてる、たどり着けてしまう問いではなく、教わった知識を使ったり、もう少し詳しく知りたいと思ったことを調べたりしながら考えがもてるレベルに設定することに注力した。このレベルに設定することで、「集団」での活動の際にも多様な考えを共有することができる。考える過程で教科の魅力に気付くような問いを設定できるかが鍵となる。

「考えさせる問い」に使う知識を「教える」

1年目の研究で、私たち教師側に「そもそも学習の仕方を教えてこなかったのではないか、必要な知識をしっかりと定着させてこなかったのではないか」という反省が生まれた。生徒に自分の考えをもたせる上で必要な知識や技術は何か、定着させておかなければならない知識は何か、しっかりと整理することに努めた。

また、知識が定着したかどうかを、アウトプット(説明させる、記述させるなど)させ確認する機会を設定した。

考えさせる 広げる 深めさせる

東京女子体育大学名誉教授の田中洋一先生が提唱される「個→集団→個」の活動である。最初に個人の考えをしっかりともたせておくことで、「集団」での活動により広がりが生まれて効果的なものとなる。さらにもう一度「個」に戻した際に、自らの変容を実感しやすくなる。

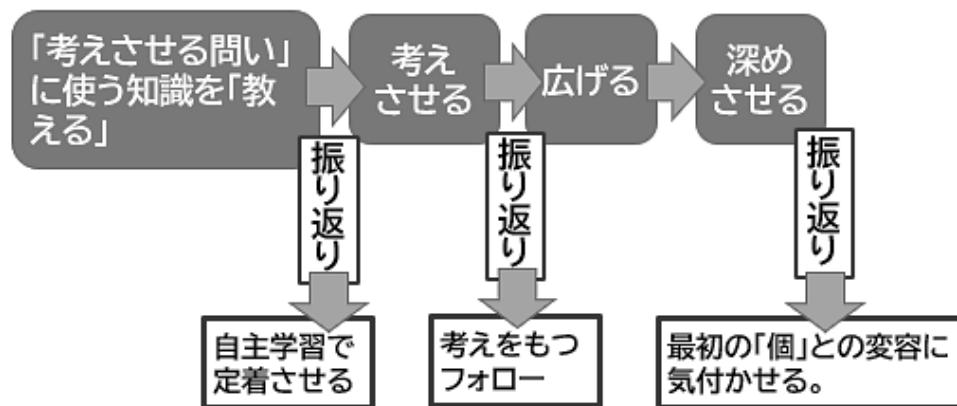
ここでの「変容・深まり」とは、「元々もっていた考え自体は変わらないが、より詳しく説明できるようになった、新たな気づきを得られたこと」を指す。

本研究では、振り返りの際に生徒自ら変容や深まりに気づきやすくなるよう、「個→集団→個」の流れが一覧できるようなワークシートを心掛けた。

2. 次の活動に入る前に「分かったこと」「分からなかったこと」、「できたこと」「できなかったこと」を振り返らせる

授業デザインを用いた単元を実践した際には、少なくとも3回は、次の図に示すタイミングで振り返りを行うよう意識した(毎時間振り返りを行った教科もある)。特に1回目、2回目のタイミングは、活動が大きく変わるタイミングであり、生徒の定着度によって活動の活性度が変わってくるためである。教師が理解の定着度を見極め、次の活動に進めるか立ち止まって復習するか判断材料にできる。

- 1回目:「個→集団→個」の活動に入る前。知識が定着しているかどうかをしっかりと振り返らせ、分からなかったこと、できなかったことの記述を確認する。分からなかったこと、できなかったことに同じことが多く記述されている場合は、「個→集団→個」の活動に入る前に全体で復習の必要があると判断する。
- 2回目:「集団」の活動に入る前。「個」の考えがもてていないと「集団」での活動に対する参加意欲が低下してしまう。自分の考えをもてたかどうか、一度振り返らせることで、もてなかった生徒へのフォローをするためのスクリーニングをすることができる。考えをもてずにいた生徒を自習室へ呼び、次の授業までにできれば一緒に考えをもてるようフォローしたい。
- 3回目:最後の振り返りは、「変容・深まり」を実感させる振り返りである。最初にもった考えと比較させ、自分の成長や変化に気付かせたい。この段階では「分からなかったこと」に「もっと調べたいこと、考えたいこと」を記入する生徒が増える。自習室を使って、探究のフォローをしたい。



3. 全教科共通の板書デザイン

今日の授業は何がめあてで、どのような流れで進み、何を振り返って自らの達成度を確認すればよいのかを黒板に明示し、生徒が授業中にいつも確認できるようにした。

①めあて ②流れ ③振り返り
が一覧できる板書を全教科で実施した。

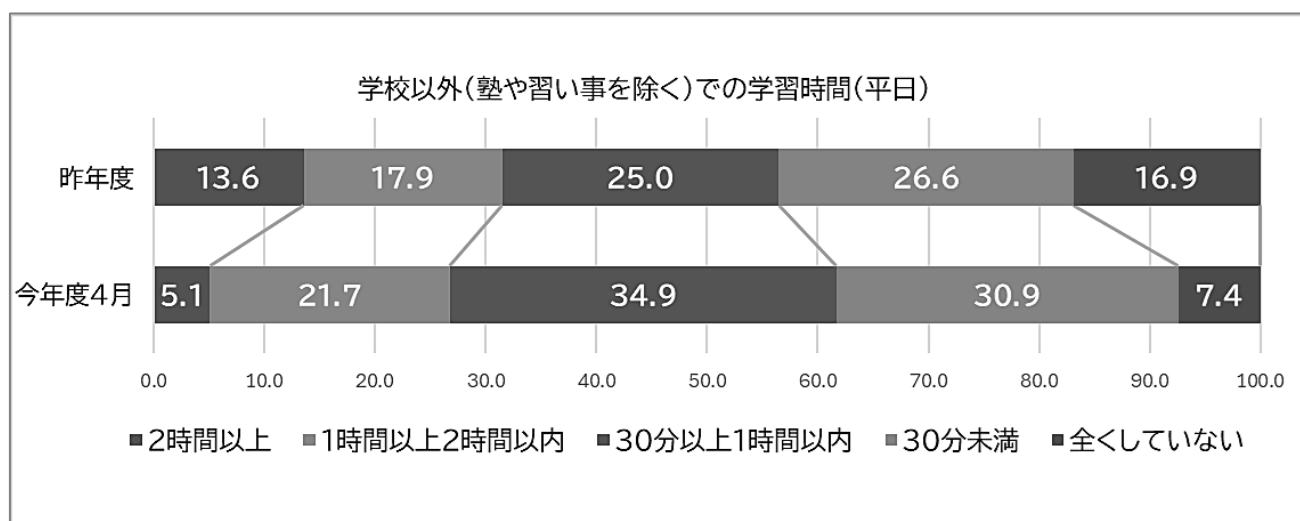
研究の特徴② 自主学習を促す仕組みづくり

1. 自主学習の仕掛けを考えるに至った理由

本校では、授業内で分からなかったことを分かるようにするための学習(復習)や、もっと知りたいと思ったことについて調べたり考えたりする学習(発展的な学習)、次の授業に向けて教科書を読んでおいたり、少し問題を解いておいたりする学習(予習)を含めて「自主学習」と定義している。

個→集団→個の活動を実践する中で、最初の「個」の時間に自分の考えをもたせるためには、必要な知識の定着が欠かせないことが分かってきた。しっかりと理解できていないまま、個→集団→個の活動に入っても、学びの深まりが弱いことは明らかである。

次のグラフは、都調査の家庭学習に関する質問項目の結果である。平日、学校や塾以外でどれくらいの学習時間をとっているかを尋ねたものである。このことにより、授業中に解決できなかったことの復習やもっと知りたいと思ったことの探究活動を家庭でどのくらい実施できているかが分かる。



昨年度から今年度4月にかけて、1時間以上学習する生徒数に減少が見られたのは、新入生が入ったことが要因の一つではある。しかしながら、1時間以上、主体的な学習に取り組んでいる生徒が少ないことは、大きな課題の一つであると考えた。

そこで、授業デザインの中に、自主学習を仕掛ける仕組みができないかを検討することとした。

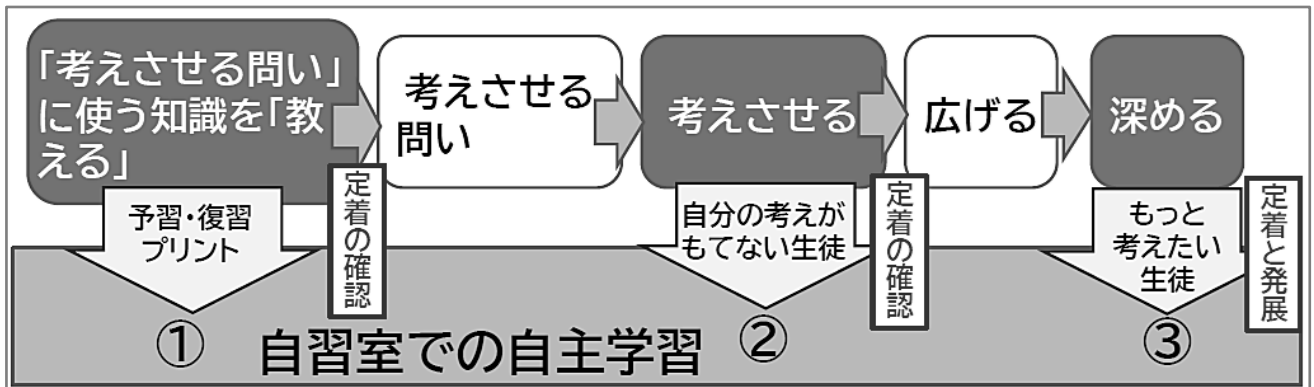
2. 自主学習の仕掛け—生徒の要望から生まれた自習室の設置を活かして—

本校生徒の様子を観察していると、授業終了後に教室に残って書き続ける生徒、質問に来る生徒が少なくない。本当は、もう少し調べたい、分からないことをすぐに解決しておきたいと考えている生徒がいることも事実である。しかし、部活動や委員会活動、習い事などとバランスをとりながら学習時間を確保することに苦労している生徒も少なくない。

逆に学習そのものをあきらめてしまったり、分かったという経験や喜びそのものを実感できていなかったりする生徒がいることも事実である。

このように様々な生徒に対応できる自主学習の方法はないものか。個→集団→個の活動に入る前に、しっかりと知識の定着を手伝えるような仕組みをつくれないうか考えた。

そこで、生徒の要望に応じて設置した「自習室」を活用して自主学習の仕組みをつくることにした。「自習室」とは、放課後に学習のために開放した空き教室である。自主学習の仕組みは次のとおりである。



授業で自主学習の仕掛けを3回行う。必ず3回というわけではなく、単元内容や教科の特性に応じてその回数は調整する。(以下に示す○数字は、上記の図内にある○番号を指す。)

①の自主学習について

主に知識の定着をねらいとした予習・復習型の仕掛けである。考えさせる問いを考える前に、定着させておきたい知識について、予習プリントで学習させてくる、または授業後に復習プリントで学習させるなどの仕掛けを行う。ただし15分から30分程度で終わられるような負担感の少ない課題とする。そうすることで、学習に意欲的に取り組めない生徒でも、「できた」「頑張れた」という達成感を味わえる。

一人で学習することが難しい生徒は、教師が呼びかけて自習室で実施する。また、家で学習することが難しい生徒は、少し自習室に残って課題を終わらせてしまうなど、それぞれのニーズに合わせた知識の定着を目指した。自習室では、課題を出した教科担当が生徒の自主学習を見守る。

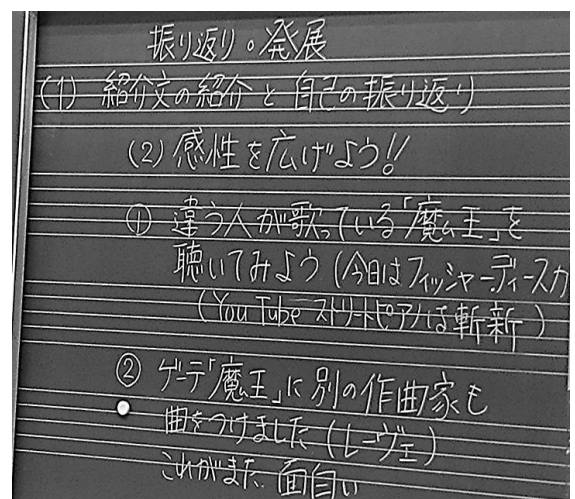
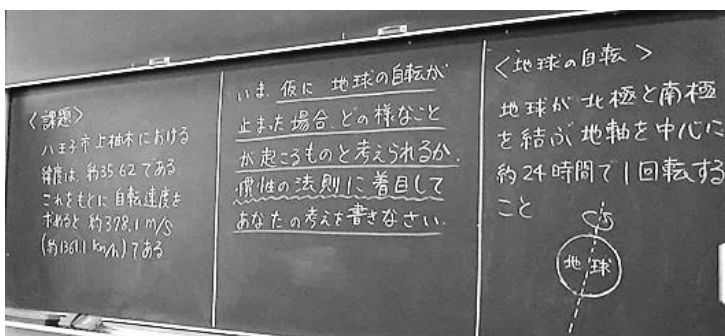
②の自主学習について

最初の「個」の活動段階で、自分の考えがどうしてももてなかった生徒をフォローすることをねらいとした仕掛けである。教師側から残ってほしい生徒を指名し、一緒に自習室で考える。この時間をもつことで、集団での活動への参加意欲が変わってくる。同時に授業時間内では考えがまとまらなかった生徒、考えをもつためにもう少し調べたり考えたりしたい生徒の利用も見られた。

③の自主学習について

主に発展的学習をねらいとした自主学習である。
 個→集団→個の最後の「個」の活動を終えた後で、さらに調べたり考えたりすると面白いという視点を授業で提示する。
 これらの課題について調べたいと思った生徒が自習室に残って学習する。同時に最後の「個」がまとめられなかった生徒についても、フォローする時間とする。

[授業の最後に発展的課題として提示した例]
 (左:理科、下:音楽)



4. UT(ユニバタイム)を使った自主学习

自主学习といっても、なかなか放課後に時間を確保できないときがある。そのようなときに、本校が独自に行っている UT(ユニバーサルタイム、略してユニバタイム)を活用した。

ユニバタイムとは、水曜日の5校時をあて、生徒が話したい教師を指名して1対1、または少人数で話をするための時間である。学習面の課題や人間関係の悩みなどについて、生徒と一緒に考えていくことがねらいである。ユニバタイムで話す予定のない生徒は、全員下校となる。水曜日は部活動も設定しない。教師からの逆指名もできる。そのため、静かな空間でゆったりと生徒と向き合うことが可能となる。

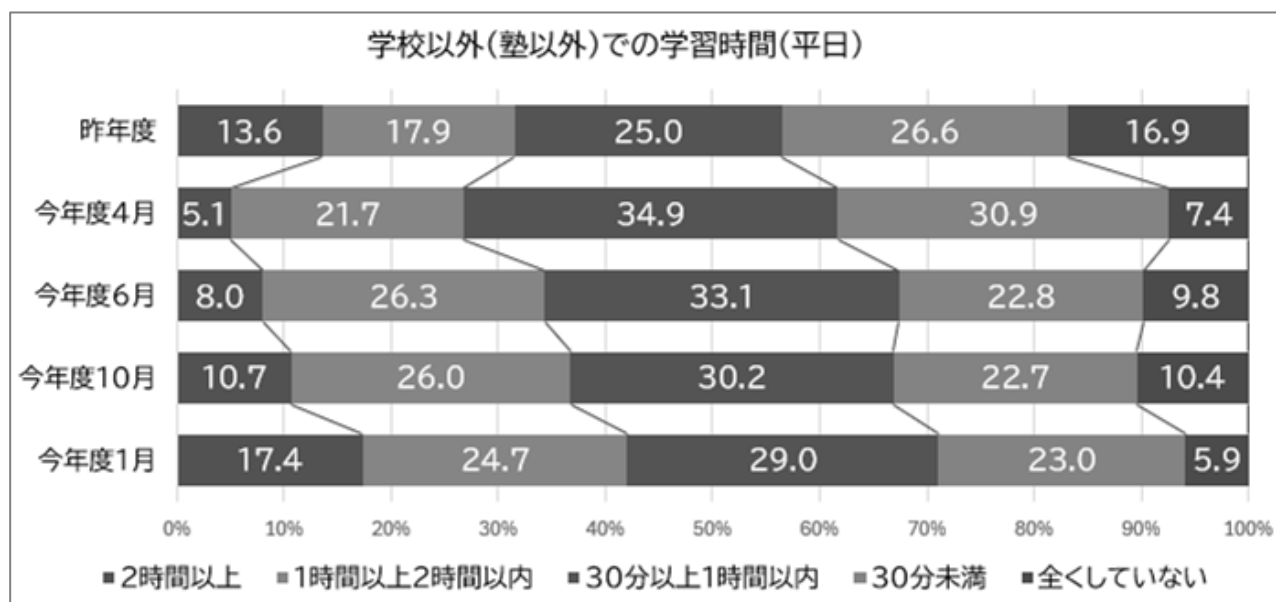
この時間を使って、ふだんの授業でゆっくり向き合えない生徒を逆指名し、自主学习を1対1で行った。このことがきっかけとなり、自ら自習室に足を運んだり、教師に質問したりできるようになった生徒もいた。一人ひとりの特性に向き合いながら、少しでも多くの「分かった、できた」に向き合える時間が設定できるよう努めた。



UT(ユニバタイム)の一場面から

5. 現段階での自主学习に対する意識の変容

若干ではあるが、学校・塾・習い事以外での学習時間が増えたことを確認した。第1学年においては、自習室の利用以外にも「自主学习ノート」を利用した家庭学習指導を行っており、その成果もあると考えられる。

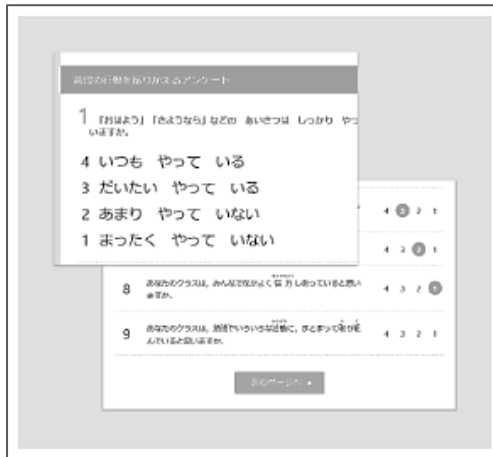


研究の特徴③ WEBQU を使った学習席の作成

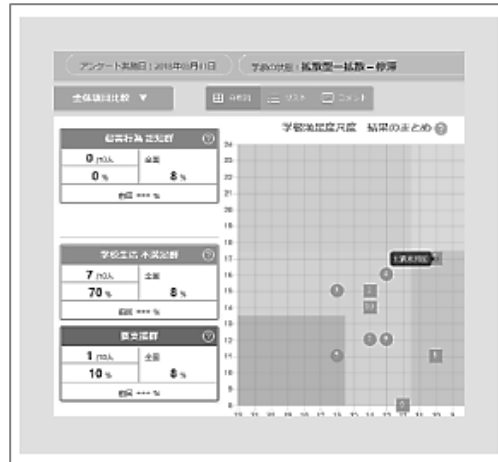
1. WEBQU とは

Q-Uは早稲田大学の河村茂雄教授が開発した、学校・学級生活への不適応、不登校、いじめ被害の可能性の高い子どもを早期に発見できる心理テストである。(「QUについて」(株)WEBQU 教育サポート HP <https://www.webqu.jp/> より引用)

WEBQUでは生徒の学級満足度をアンケート実施日当日に把握することができ、学級経営のヒントだけではなく、アクティブラーニングをする上で、どのような配慮や視点が必要なのか、情報が提供される。



1. WEB 上で質問に答える。



2. 即日結果を確認することができる。

「利用イメージ」株式会社 WEBQU 教育サポート HP <https://www.webqu.jp/uses.html> より引用

○実際のコメント画面より

児童生徒集計 コメント			
親和型—安定—活用			
ルール	リレーション	安定度	活性度
<p>学級のルールがほとんどの児童生徒たちに共有されており、教師の指示がなくても注意しあいます。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>具体例 児童生徒のルールを内在化した行動を、定期的な全体の前で取り上げ、承認してあげるというでしょう。</p>	<p>児童生徒同士が支えあい、学びあうような関わりがとて多く、全体で本音の交流ができています。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>具体例 すべての児童生徒が主体的に活動できるように、役割分担を柔軟に行って、取り組ませるといいでしょう。</p>	<p>一人一人が友達や教師から認められ、学校生活に満足感や充実感を持って生活しています。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>具体例 児童生徒にいろいろな役割を分担させ、各自の資質・能力が拡大するように、活動させていくといいでしょう。</p>	<p>児童生徒同士に共に学びあう姿勢があり、皆で一つの方向にまとまって活動することが可能な状態です。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>具体例 慣れ親しんだ活動だけではなく、新奇な課題にも取り組みせ、児童生徒の意欲を刺激していくといいでしょう。</p>

2. 山梨県甲州市立塩山中学校での視察を通して

令和6年度に WEBQU を活用した学級集団づくりに取り組まれている山梨県甲州市立塩山中学校を視察した。甲州市立塩山中学校では、WEBQU を活用した集団づくりの一環として、教師用の座席表作成を行っている。下図のように WEBQU の所属群、配慮と関わりのスキル(※1)を座席表に明示し、それぞれの生徒にどのような声かけや対応を行っていけばよいか分かるような工夫をしている。

※1 配慮のスキル…他者に気遣いができるか、 関わりのスキル…他者に積極的に働きかけることができるか。

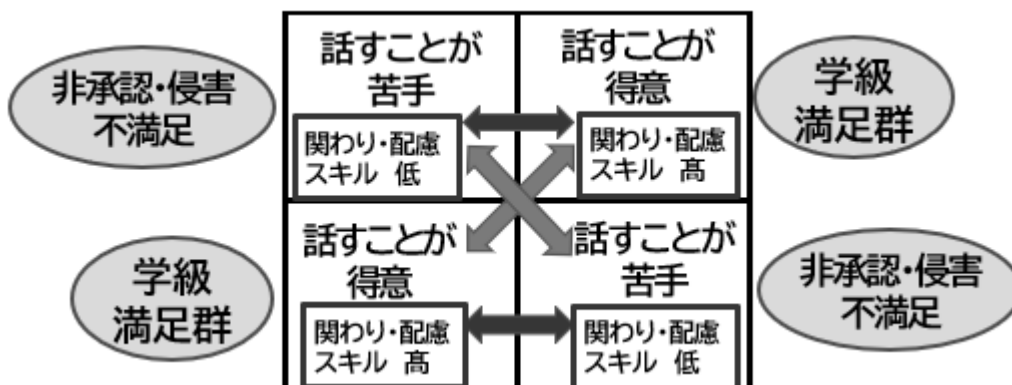
生徒名									
スキル→		配慮		関わり					

所属する群
A: 満足群、B: 非承認群、
C: 侵害群、D: 不満足・要支援群

この WEBQU に基づいた座席表の考え方を取り入れることで、より活発に個→集団→個の「集団」の活動が進められるのではないかと考えた。

3. 本校での座席表の作り方について

「集団」における話し合いやペア学習が活発に進めていけるよう、次のような考え方で座席表を作成した。



4人班を基本として作成した。

学級満足群かつアウトプット等を得意とする生徒を対角線上に配置し、それ以外の群に所属し、かつアウトプットをあまり得意としない生徒を反対角線上に配置する。対角線上で話し合わせることで、アウトプットを苦手とする生徒の参加度も高くなることを確認している。

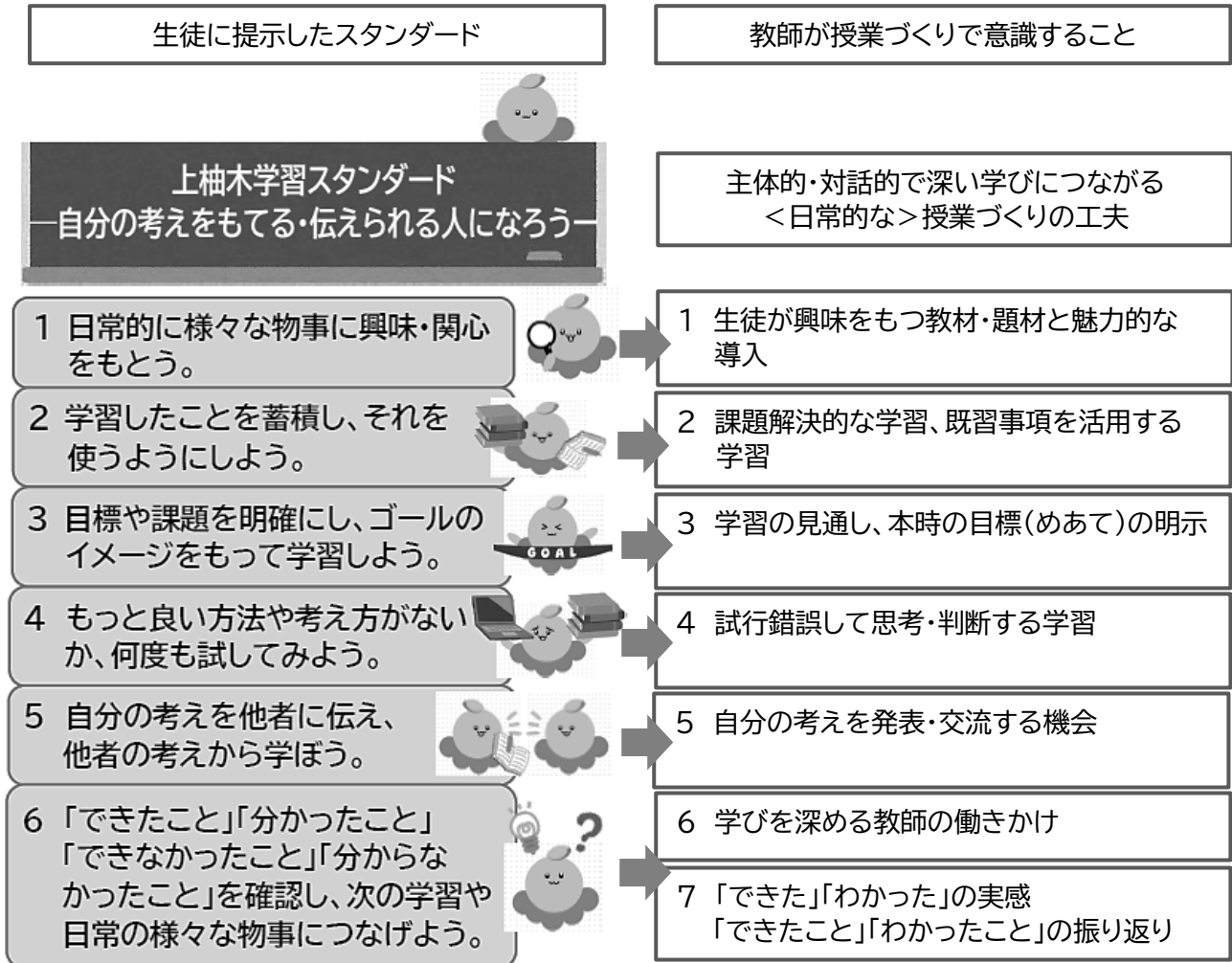
また、隣同士、前後同士でペア学習をさせた際も、学級満足群とそれ以外の群のペアを作ることができる。実際には、下図のような座席表を作成して授業に取り入れた。

定期考査などの 達成率	生徒名		II	生徒名		I
	89.5%	2	2	84.5%	3	3
	生徒名		I	生徒名		II
	69.8%	2	2	59.0%	3	3

(左)配慮のスキル (右)関わりのスキル

研究の特徴④ 上柚木学習スタンダードの共有

十文字学園女子大学教授 富山哲也先生に御指導を賜り、本校の取組を「上柚木学習スタンダード」として次のように整理した。授業は教師と生徒が共に作り上げるものである。教師だけが授業改善に取り組むのではなく、生徒にも理解してもらい、共に意識する環境がつかれるよう、学校朝礼で呼びかけたり、廊下や教室へポスターを掲示したりするなどして、生徒も教師も同じ意識をもって研究に取り組めるようにした。



学校朝礼にて「上柚木学習スタンダード」について説明。

八王子市教育委員会 挨拶

八王子市教育委員会 教育長 安間 英潮



市立上柚木中学校は、東京都教育委員会授業改善推進拠点校、八王子市教育委員会研究奨励校として研究に取り組み、この度、その成果をまとめた「研究紀要」を発刊されましたこと、心よりお祝い申し上げます。

令和7年9月に文部科学省から示された学習指導要領の改訂に向けた論点整理では、変化の激しい不確実な社会において、学びを通して自らの人生を主体的に切り拓き、多様な他者とともに生きる力を育むことの重要性が示されています。こうした時代の要請に答えていくためには、これまでの授業観を転換し、子どもたちが主体的に思考し、学びを発展させていくプロセスが重要になります。

市立上柚木中学校では、「生徒一人一人が自分の考えをもてる授業づくり」を研究主題に掲げ、「個－集団－個」の学習過程を重視した実践を積み重ね、子どもたちの「学びに向かう力」の育成に教員が一丸となり、取り組んでこられました。

この取組や成果は今後の授業改善を進める上で示唆に富むものであり、それが広く共有されることで、東京都の教育活動の充実につながることを願っております。

結びに、本研究を進めるにあたり御指導を賜りました講師の皆様、並びに東京都教育委員会の皆様に深甚なる謝意を表し、発刊にあたっての挨拶といたします。

校長 挨拶

八王子市立上柚木中学校 校長 三田村 裕



令和3年4月、本校に着任した私は、中央教育審議会「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」の理念をいかに実現するかについて、当時の教職員と熱く語り合いました。その熟議が本校にとっての新たな出発点となり、翌年度には学校教育目標を全面改定しました。また、生徒一人一人に寄り添い、一人一人の課題に対応することを理念に、生徒と教職員とが個別に向き合うユニバタイムを創設したり個別支援校内委員会の充実を図ったりと、新たな取組を様々行ってきました。本研究は、こうした全教職員の意欲と英知を結集した学校改革の流れの延長に位置付いています。

主体的に学びに向かう生徒。教師にとって理想であり永遠の課題でもある生徒像の実現を目指し、私たちは授業の在り方を見つめ直し、全教員共通のデザインで日々の授業を実践してきました。本紀要には、こうした実践と成果や課題をまとめています。御一読いただき、ぜひお気づきの点について様々フィードバックをいただくと幸いです。

結びに、本研究を進めるにあたり御指導を賜りました講師の皆様、多大な御支援をいただいた東京都教育委員会及び八王子市教育委員会の皆様に深甚なる謝意を表し、挨拶といたします。

研究の歩み 令和6年4月から令和8年2月まで

令和6年度

4月

- ・東京都教育委員会 授業改善推進拠点校説明会(研究の目的・課題分析の手法確認)
- ・全国学力・学習状況調査(第3学年)実施

5月

- ・八王子市学力定着度調査(全学年)実施
- ・ICT(ミライシード)に関する研修

7月

- ・WEBQU 実施及び WEBQU に関する校内研修 1回目(大学教授 招聘)
- ・「全国学力・学習状況調査」及び「八王子市学力定着度調査」結果に基づく本校の課題分析と結果報告
- ・「学びに向かう力等」に関する研修及び「学びに向かう力等」に関する意識調査(1回目)実施

8月

- ・本校の課題解決につながる授業立案(各教員)
- ・WEBQU に関する校内研修 2回目(大学教授 招聘)

9月

- ・東京都教育委員会による「全国学力・学習状況調査」・「都意識調査」のクロス集計結果を踏まえた本校の課題検討
- ・8月に立案した研究授業と協議会の実施

10月

- ・研究主題を「生徒一人一人が学び方を選択・発見する授業づくり」に設定。
- ・研究実践(1人1実践以上)(11月末まで)

11月

- ・「学びに向かう力等」に関する意識調査(2回目)実施及び1回目からの変容分析
- ・WEBQU(2回目)実施、各学年において1回目との変容確認

12月

- ・八王子市学力定着度調査(2回目/第1・2学年)実施
- ・「学びに向かう力等」に関する意識調査分析結果報告、各学年の取組報告

1月

- ・八王子市学力定着度調査(2回目)結果を踏まえて、5月実施分との変容分析・報告
- ・研究実践(1人1実践以上)(2月末まで)

3月

- ・都意識調査の分析(変容)報告、各学年の取組報告
- ・次年度に向けた研究の方向性について検討

令和7年度

4月

- ・WEBQU(1回目)・「学びに向かう力等」に関する意識調査(1回目)実施及び課題検討
- ・田中洋一先生(東京女子体育大学名誉教授)による研究の方向性に関する研修の実施
- ・研究の方向性の修正、及び主題を「生徒一人一人が自分の考えをもてる授業づくり」に再設定
- ・授業デザインの統一と確認
- ・自習室の設置
- ・全国学力・学習状況調査(第3学年)実施

5月

- ・八王子市学力定着度調査(全学年)実施
- ・WEBQUに基づく座席表の作成
- ・第1回 研究授業(国語)及び協議会 実施(講師:田中洋一先生)

6月

- ・第2回 研究授業(理科)及び協議会 実施(講師:富山哲也先生 十文字学園女子大学教授)
- ・「学びに向かう力等」に関する意識調査(2回目)実施及び分析結果報告
- ・「上柚木学習スタンダード」の作成

7月

- ・第3回 研究授業(音楽)及び協議会 実施(講師:佐藤晴美先生 昭島市立清泉中学校長)
- ・特別支援教室 研究授業 実施
- ・第4回 研究授業(社会)及び協議会 実施(講師:田中洋一先生)
- ・「学びに向かう力等」に関する意識調査結果の個票作成、三者面談にて配布

9月

- ・WEBQU(第2会)実施、学年会でのWEBQU分析及び座席表の作成
- ・全校による話し合いトレーニング開始
- ・全校朝礼において、「上柚木学習スタンダード」の共有
- ・東京都教育委員会による「全国学力・学習状況調査」・「都意識調査」のクロス集計結果を踏まえた本校の課題検討
- ・第5回 研究授業(英語)及び協議会 実施(講師:富山哲也先生)
- ・第6回 研究授業(理科)及び協議会 実施(講師:田中洋一先生)

10月

- ・第7回 研究授業(保健体育)及び協議会 実施(講師:子野日芳和先生 東京都教育庁指導部指導企画課統括指導主事)
- ・第8回 研究授業(数学)及び協議会 実施(講師:福島裕子先生 八王子市教育委員会学校教育部統括指導主事)
- ・「学びに向かう力等」に関する意識調査(3回目)実施及び分析結果報告
- ・「学びに向かう力等」に関する意識調査結果を踏まえた授業実践(各自)(1月末まで)

11月

- ・紀要用授業実践報告作成(各自)

12月

- ・東京都教育委員会 授業改善推進拠点校事業 最終報告会
- ・八王子市学力定着度調査(2回目/第1・2学年)実施
- ・紀要用授業実践報告作成(各自)
- ・校内研修(紀要原稿内容確認)(講師:田中洋一先生)

1月

- ・「学びに向かう力等」に関する意識調査(4回目)実施及び分析結果報告
- ・第9回 研究授業(国語)及び協議会 実施(講師:山口茂先生 国立市立国立第三中学校長)
- ・研究発表会に向けた発表資料作成(各自)

2月

- ・研究発表会

【校内研修・研究協議の様子】



成果と課題 —2年間の変容—

1. 本校の課題に関する変容—「学びに向かう力、人間性等」に関する意識調査結果を中心に—

本校が課題とした項目における変容から、成果と課題を確認する(本紀要8ページ参照)。

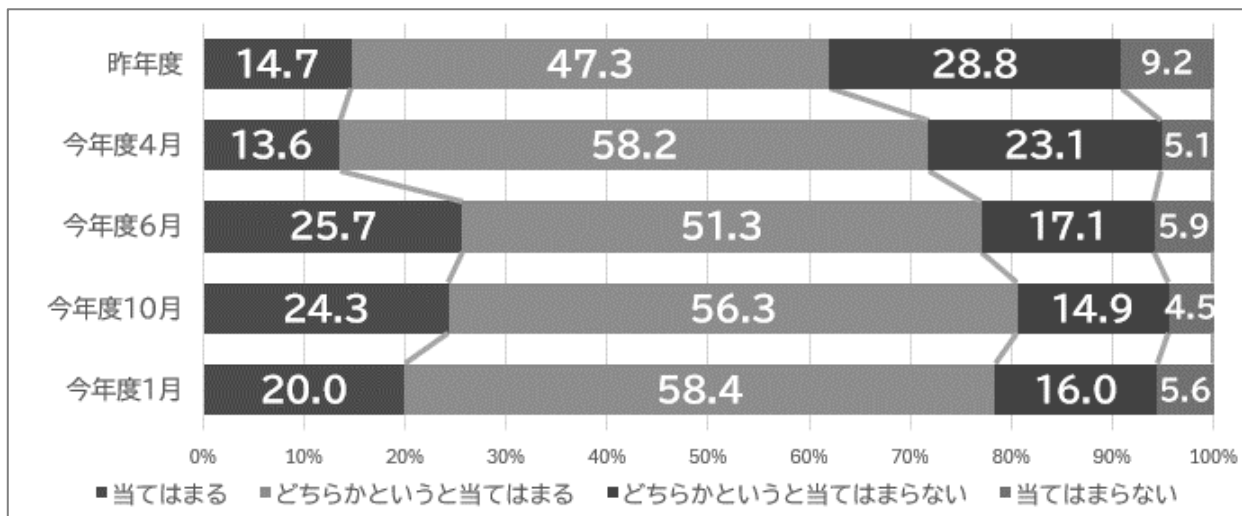
なお、変容の確認にあたっては、1年間研究に関わった生徒(1年生)を含む数値と2年間研究に関わった生徒のみの数値とを分けて確認する。

4(1)確実にできるようになるまで、繰り返し練習している。	}	粘り強さ
4(2)難しいと感じる問題でも、最後まであきらめずに取り組んでいる。		
4(5)どうやったらうまくいくかを考えてから学習を始めるようにしている。	}	学習の調整
4(7)学習をしてもできるようにならないときは、学習の方法を工夫している。		
4(11)自分が考えたことを、積極的に他の人や先生に伝えようとしている。		アウトプット(対話性)

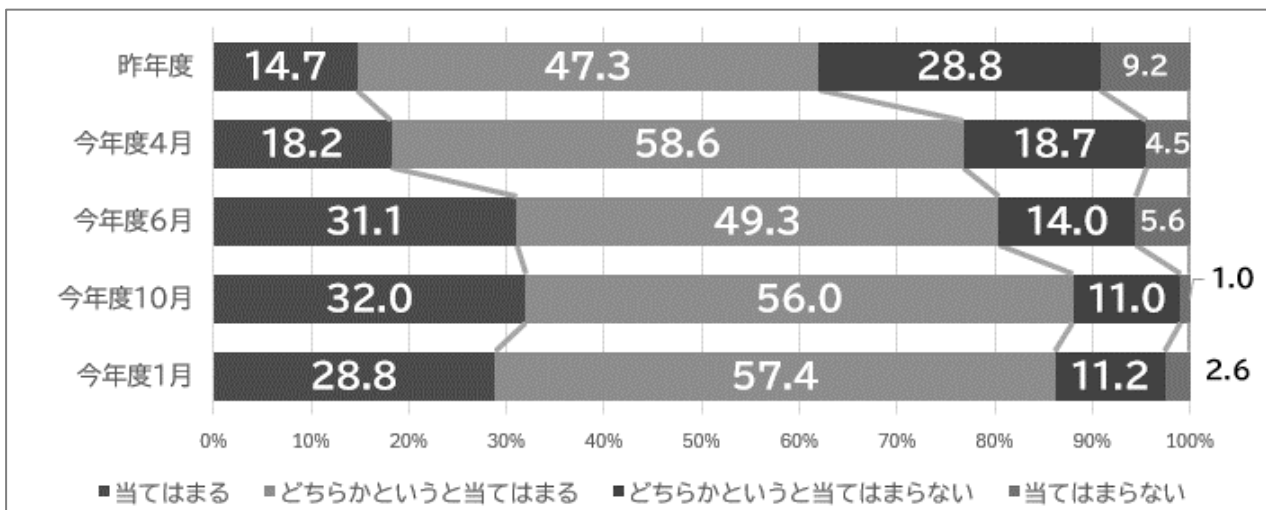
「粘り強さ」に対する意識

4(1)確実にできるようになるまで繰り返し練習している。

【第1・2・3学年】 肯定的回答 62.0%→78.4%(16.4ポイント上昇)

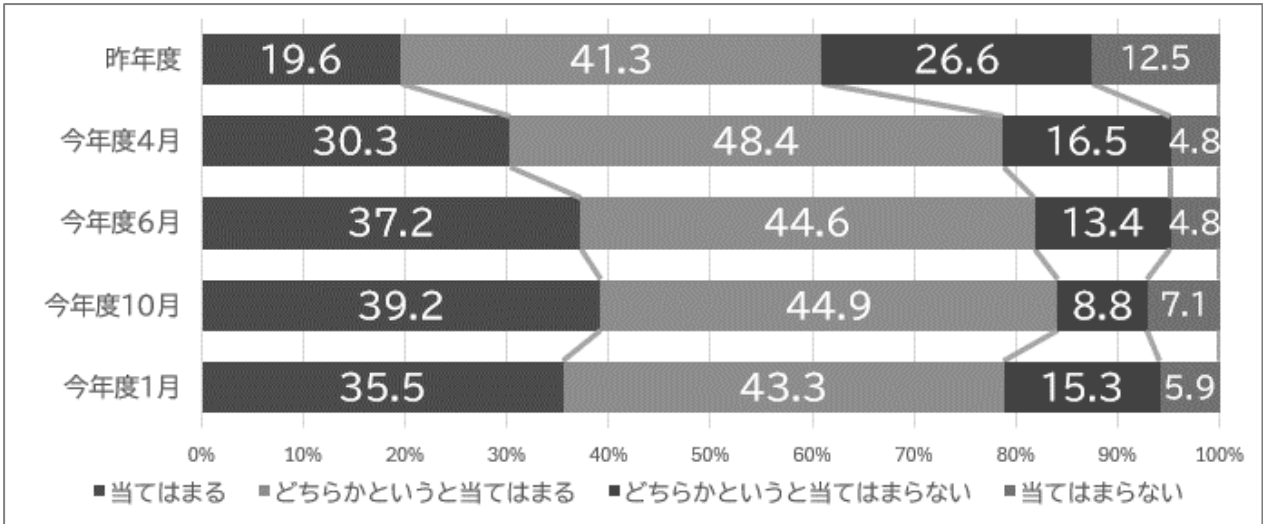


【第2・3学年】 肯定的回答 62.0%→86.2%(24.2ポイント上昇)

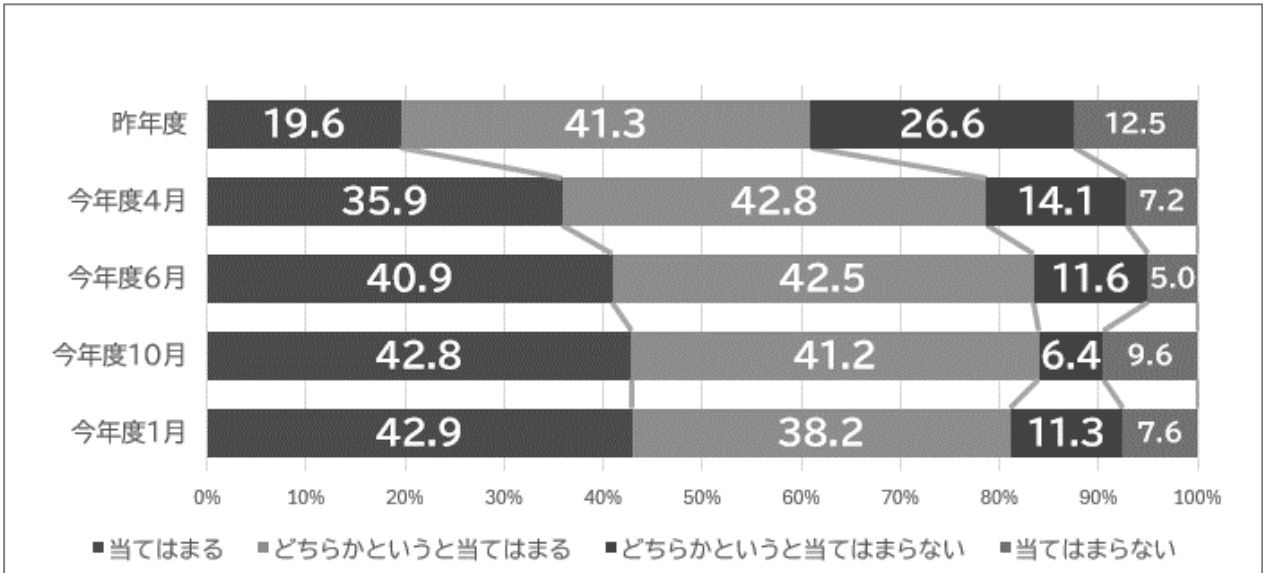


4(2)難しいと感じる問題でも、最後まであきらめずに取り組んでいる。

【第1・2・3学年】 肯定的回答 60.9%→78.8%(17.9ポイント上昇)



【第2・3学年のみ】 肯定的回答 60.9%→81.1%(20.2ポイント上昇)



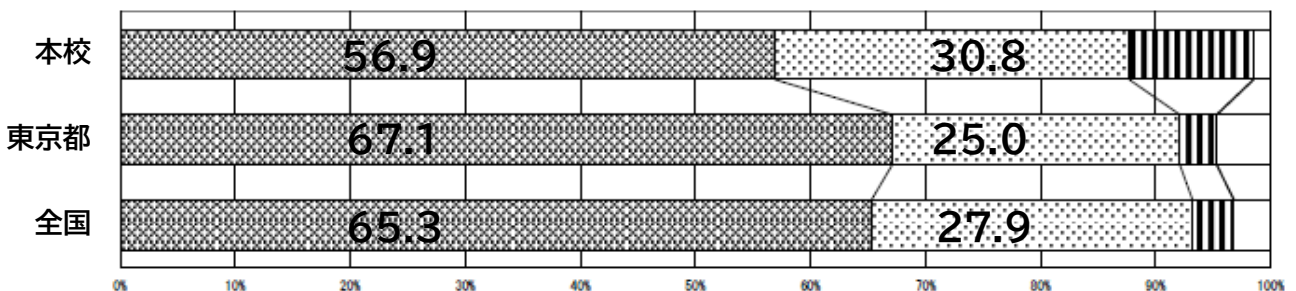
【全国学力・学習状況調査 質問調査 回答結果集計より】

○令和7年度(国語)

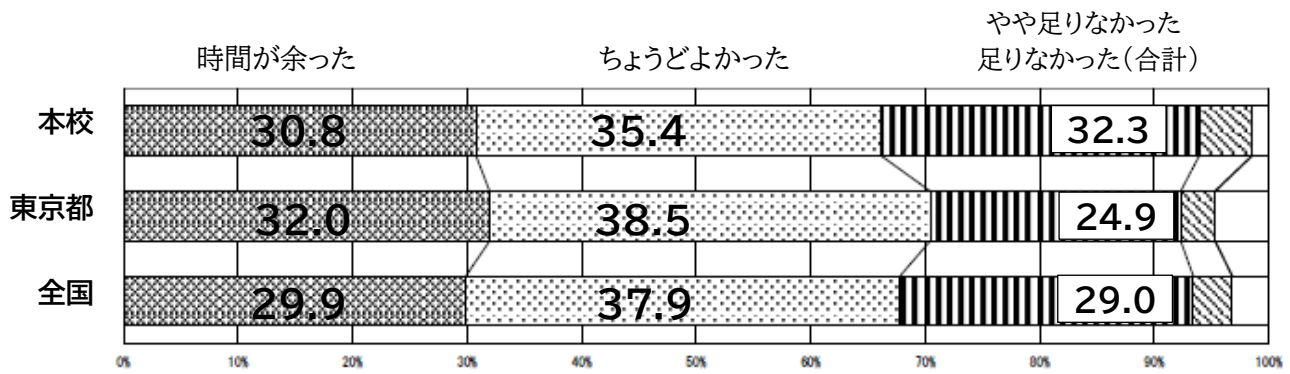
(国1)今回の国語の問題では、解答を文章で書く問題がありました。それらの問題について、どのように解答しましたか。

全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した

書く問題で解答しなかったり、解答を書くことを途中であきらめたりしたものがあった



(国2)解答時間は十分でしたか(国語)

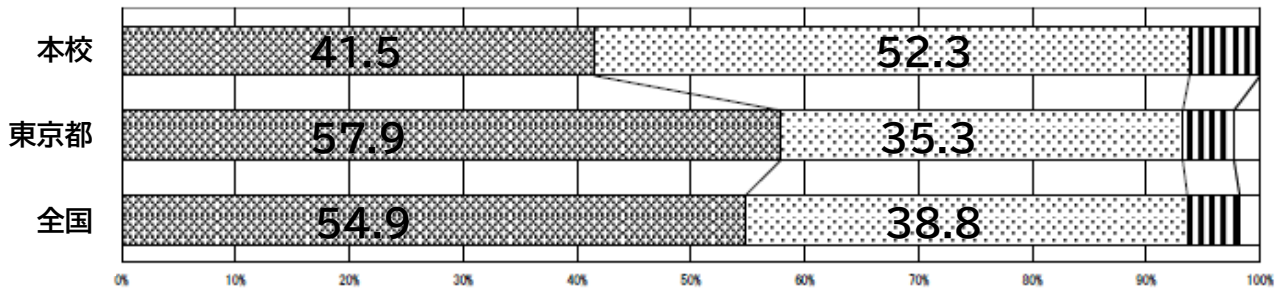


○令和7年度(数学)

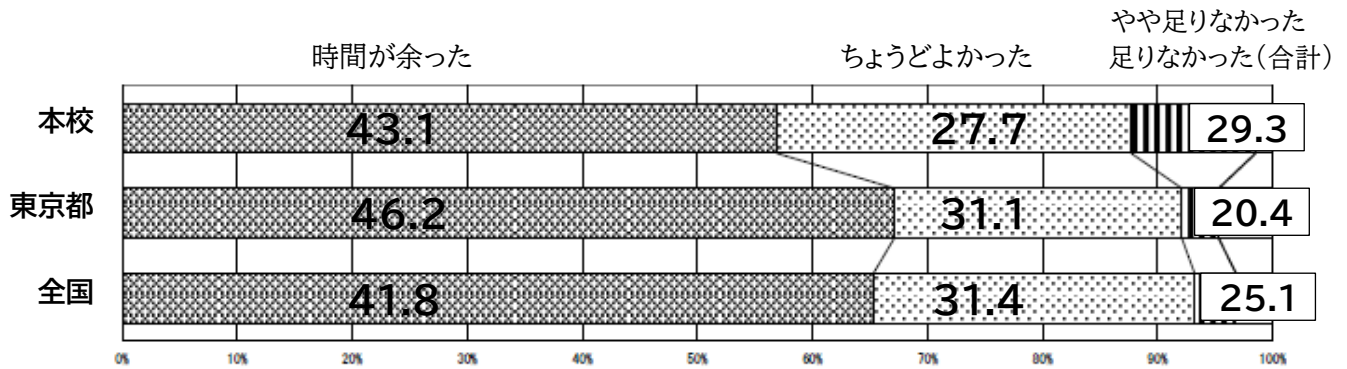
(数1)今回の数学の問題では、解答を言葉や数、式を使って説明する問題がありました。それらの問題について、どのように解答しましたか。

全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した

書く問題で解答しなかったり、解答を書くことを途中であきらめたりしたものがあった



(数2)解答時間は十分でしたか(国語)



成果 ○「粘り強さ」に関する項目については、肯定的回答の数値は概ね向上した。

(要因) 様々な学習方法の提示、個→集団→個の活動を通して様々な視点から考えられる手法を用いたことが、上昇につながった。

課題 ○時間制限があるものに関しては、「粘り強さ」を十分に発揮できない。作業性(速さ)に課題。

→国調査の結果を通して、次の2点から作業性(速さ)に課題があること、調整力の面で改善をしていく必要があることがわかった。

- ・「問題を途中であきらめた」と回答した生徒が都、全国よりも多い。
- ・解答時間が「やや足りない、足りなかった」と回答した生徒が都、全国よりも多い。

【結論】

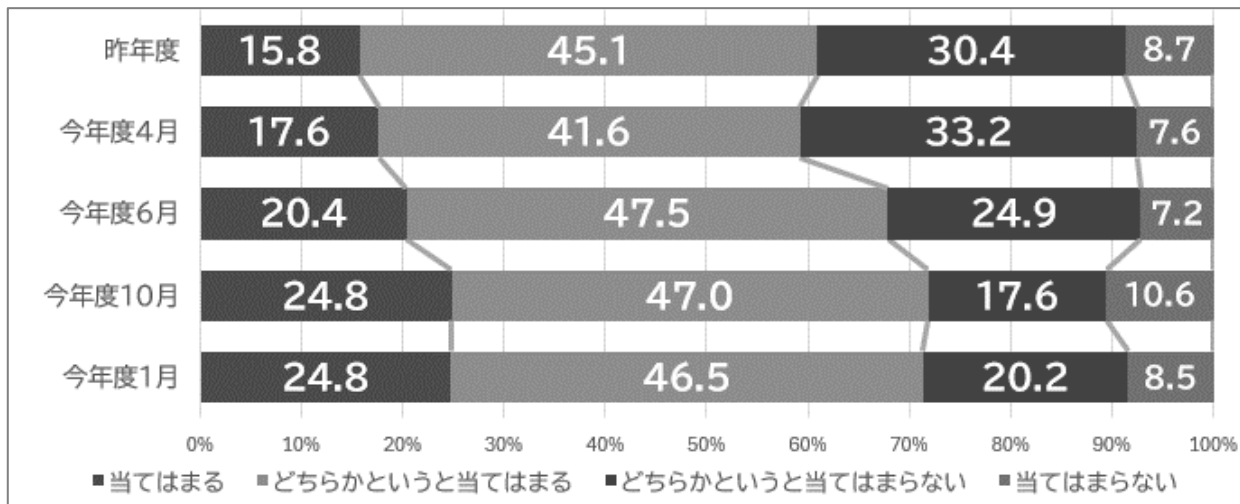
- 「粘り強さ」を発揮させるためには、十分な活動時間の確保が必要である(授業時間をどう確保するか)。
- 限られた時間で、十分に「粘り強さ」を発揮させ、調整できる力をつける方法を考えていく必要がある。

「学習の工夫(学習の調整)」に対する意識

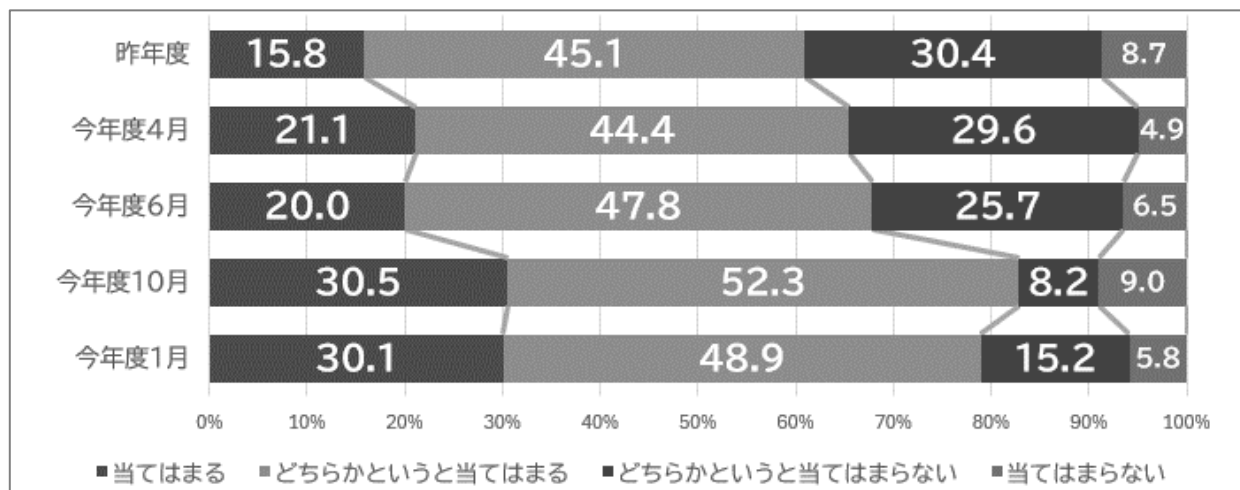
◆見通しという視点(授業面)から

4(5)どうやったらうまくいくかを考えてから学習を始めるようにしている。

【第1・2・3学年】 肯定的回答 60.9%→71.3%(10.4ポイント上昇)



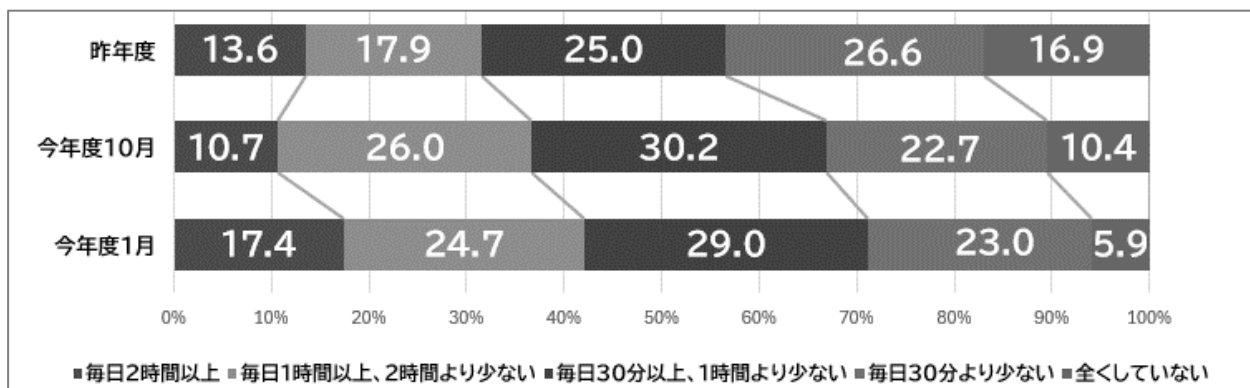
【第2・3学年のみ】 肯定的回答 60.9%→79.0%(18.1ポイント上昇)



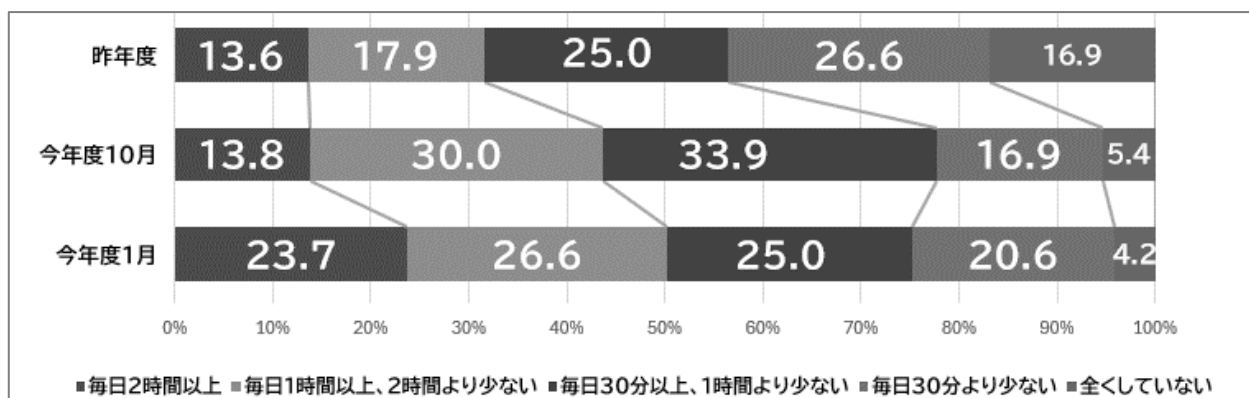
◆見通しという視点(家庭学習(自主学習)面)から

10(1)学校以外で、月曜日から金曜日まで、毎日およそどのくらいの時間学習をしますか(学習塾や家庭教師による学習、習い事の時間は含めません)。

【第1・2・3学年】

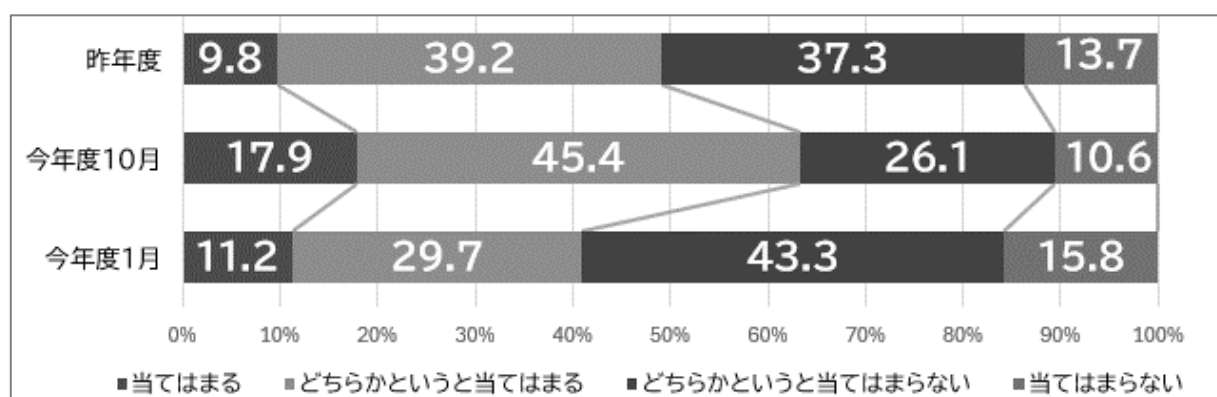


【第2・3学年のみ】

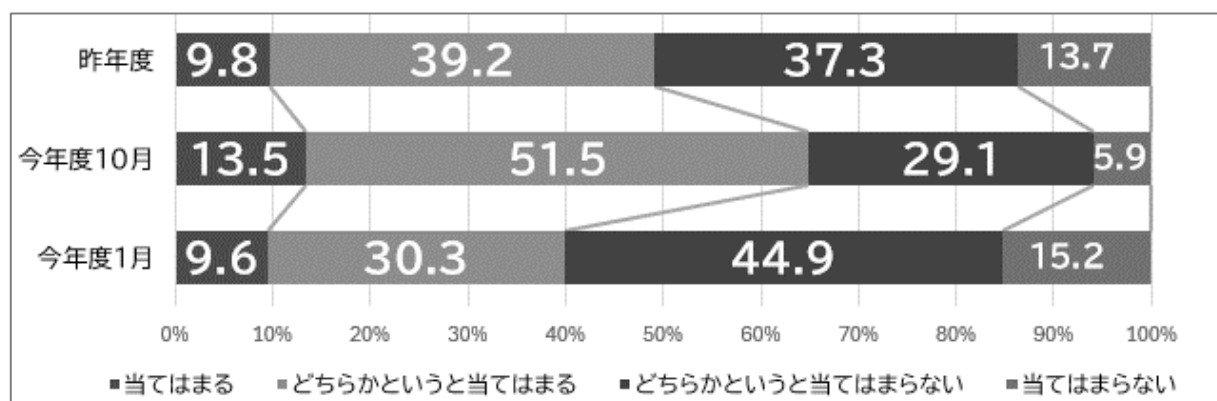


10(3)教科書を読むなどして、授業でこれから学習することの見通しをもつようにしている。

【第1・2・3学年】

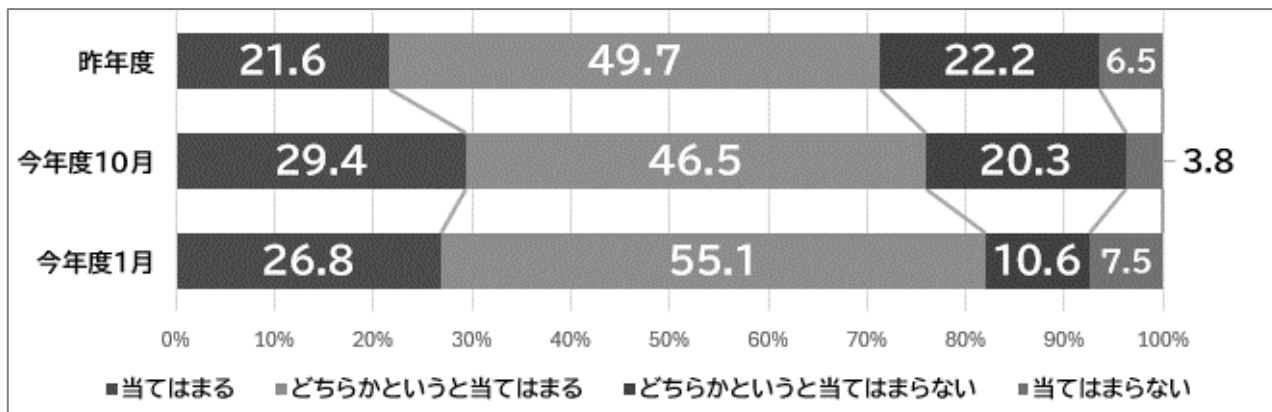


【第2・3学年のみ】

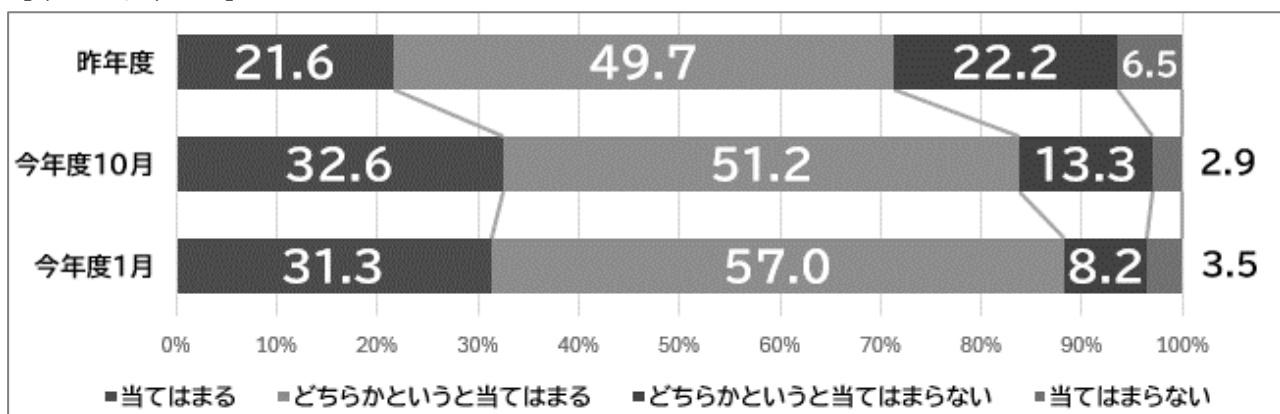


10(6)授業で学習した内容について、疑問に思ったことや興味をもったことを調べるようにしている。

【第1・2・3学年】



【第2・3学年のみ】



成果 ○授業において「見通しを立てて学習する」という点では、肯定的回答の数値が増加した。

(要因)

- ・共通の授業デザインを用いたことで、教師側がしっかりと単元全体の見通しをもつことができ、生徒への指示が明確になった。
- ・黒板に、「めあて」、「流れ」を明示したことが、見通しをもてたことの実感につながった。

課題 ○家庭学習を通して見通しを建てさせるために、授業デザインに「予習」を入れたが、都調査10(3)「教科書を読むなどして、授業でこれから学習することの見通しをもつようにしている。」に対しては課題が残った。

- 家庭学習時間自体は増えたが、「予習」ではなく「復習」に力を入れる生徒が多い。「復習」の中でも都調査10(6)「授業で学習した内容について、疑問に思ったことや興味をもったことを調べるようにしている。」に対する意識の高さがうかがえた。一つの成果として捉えたいが、「予習」への意識を高める方法については継続して考える必要がある。

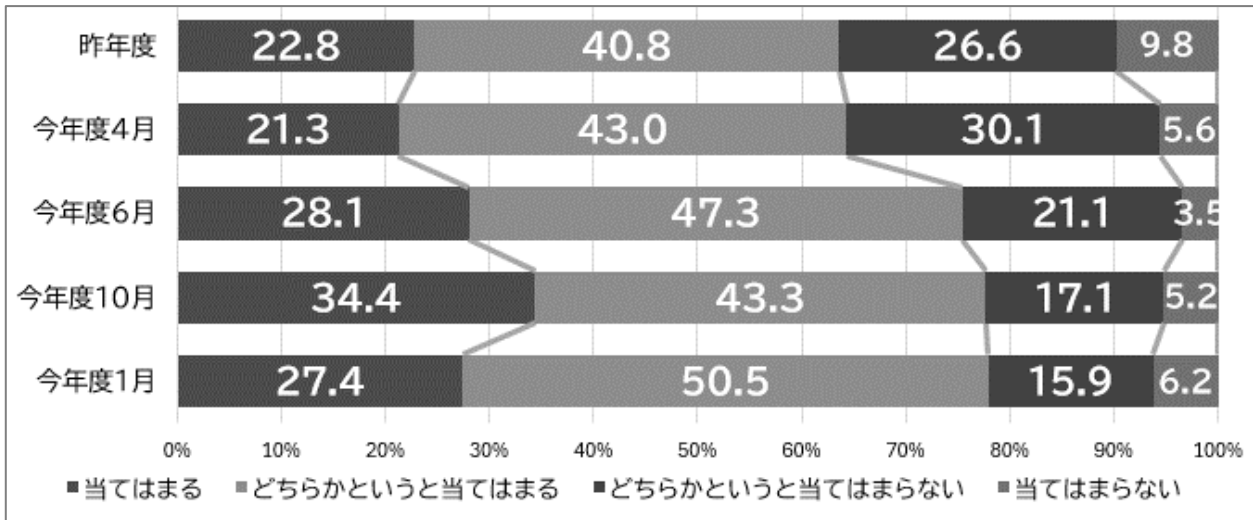
【結論】

- 授業デザインを使った取組は、生徒に見通しをもたせた学習をさせる上で有効である。
- 見通しをもたせるという点で「予習」を仕掛けたが、主体的に予習するところまではいかなかった。
- 家庭学習では、予習よりも復習に力を入れる生徒が多い。その中でも授業で学習したことで疑問に思ったことや興味をもったことを調べる生徒が増えた。

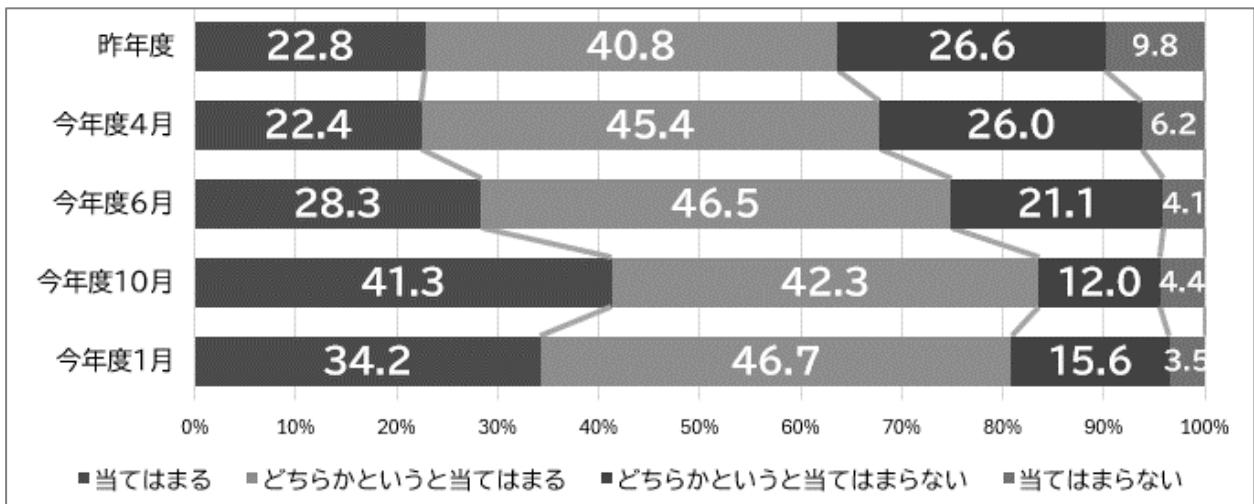
◆学習の工夫(学習の調整)という視点から

4(7)学習をしてもできるようにならないときは、学習の方法を工夫している。

【第1・2・3学年】 肯定的回答 63.6%→77.9%(14.3ポイント)



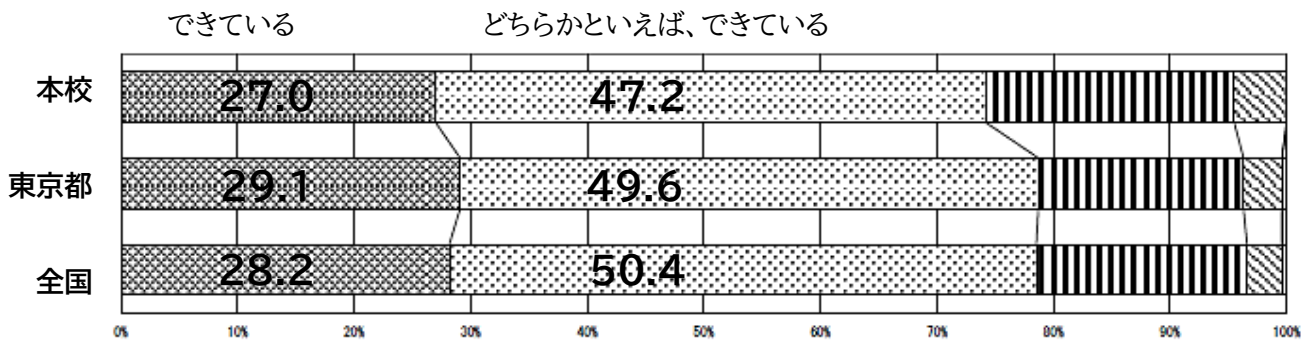
【第2・3学年】 肯定的回答 63.6%→80.9%(17.3ポイント上昇)



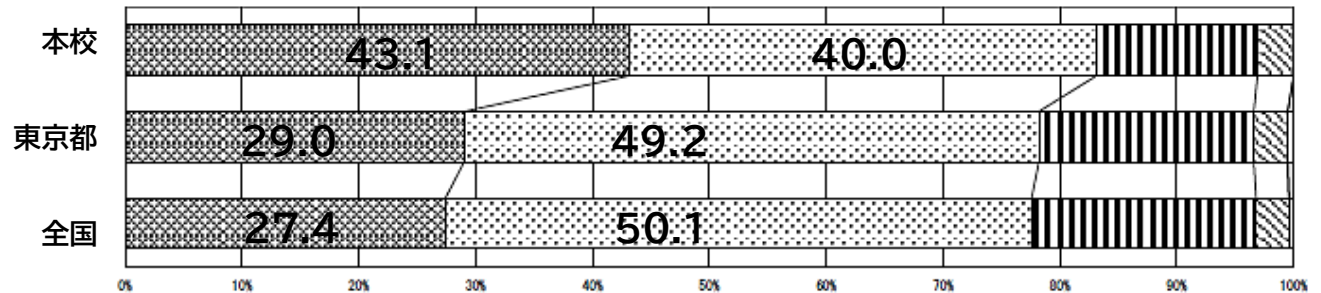
【全国学力・学習状況調査 質問調査 回答結果集計より】※()内の番号は、今年度のもの。

(16)分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか。

○令和6年度(昨年度)



○令和7年度(今年度)



成果 ○国調査、都調査ともに、「学習の工夫」に対する意識の向上がみられた。

(要因)

- ・多様な考えが生まれる「考えさせる問い」を設定したことで、考えをもつまでの過程に試行錯誤する姿(教師に聞く、タブレットで調べる、友達と話し合う、教科書以外の資料を使って調べるなど)が見られた。
- ・個→集団→個の活動を設定したことで、「集団」の活動のときに、考えを交流するだけでなく、考えをもつための方法自体も交流する姿が見られ、生徒自ら学び方の選択肢を広げることができた。
- ・「考えさせる問い」に対して、どのようなアプローチがあるか、考える方法や視点を教師側が提示したことで、他の教科や別の課題でも使ってみようとする生徒がみられた。

課題 ○都調査10月と1月の変容から、継続的に「考えさせる問い」を設定した授業をしていく必要がある。

→今回提案する授業デザインは、授業時間数を十分に確保しなければならないという課題がある。
継続的に実施するためには、授業時間数をどのように工夫して捻出するかが鍵となる。

【結論】

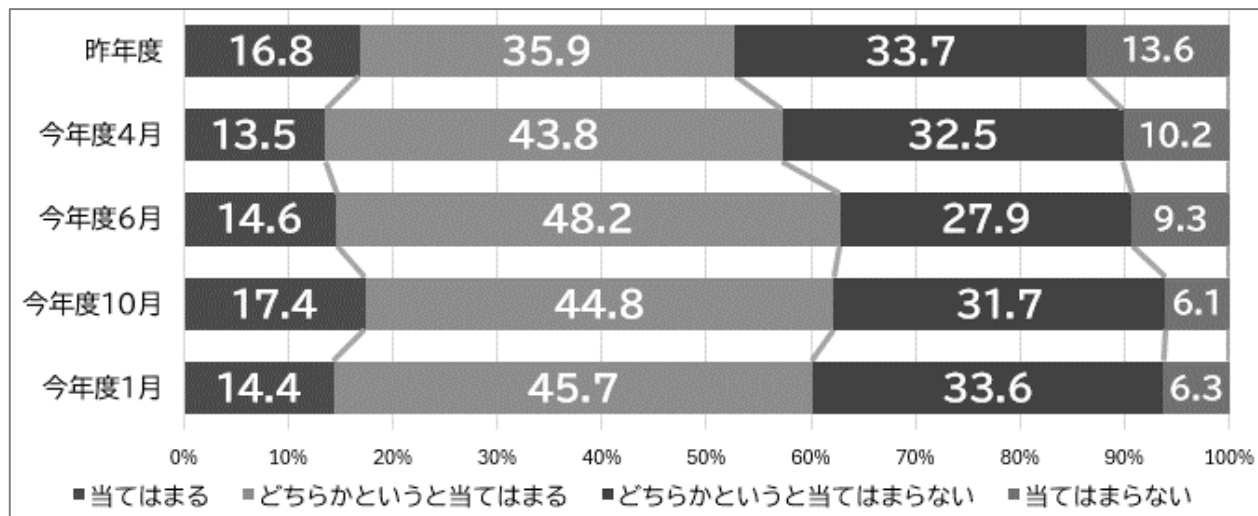
○学習を工夫させるためには、多様な考えが生まれる問いの設定すること、「個→集団→個」の流れを通して「自分の考えをもたせる」活動をさせることが有効である。

○授業時間数がかかる授業デザインであるため、継続性をもたせるための計画が必要。

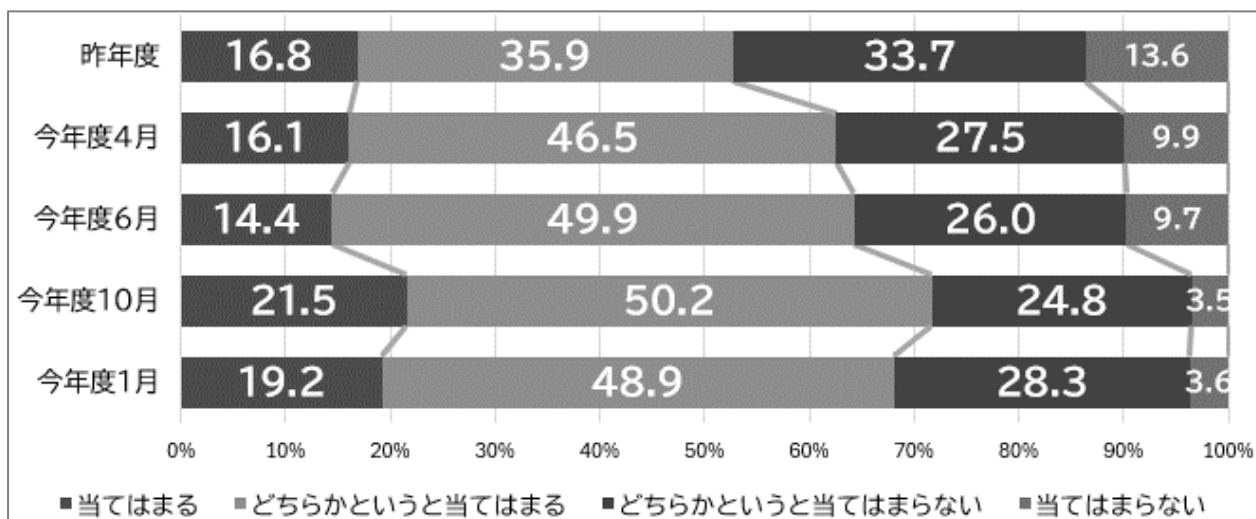
「アウトプット(対話性)」に対する意識

4(11)自分が考えたことを、積極的に他の人や先生に伝えようとしている。

【第1・2・3学年】 肯定的回答 52.7%→60.1%(7.4ポイント上昇)

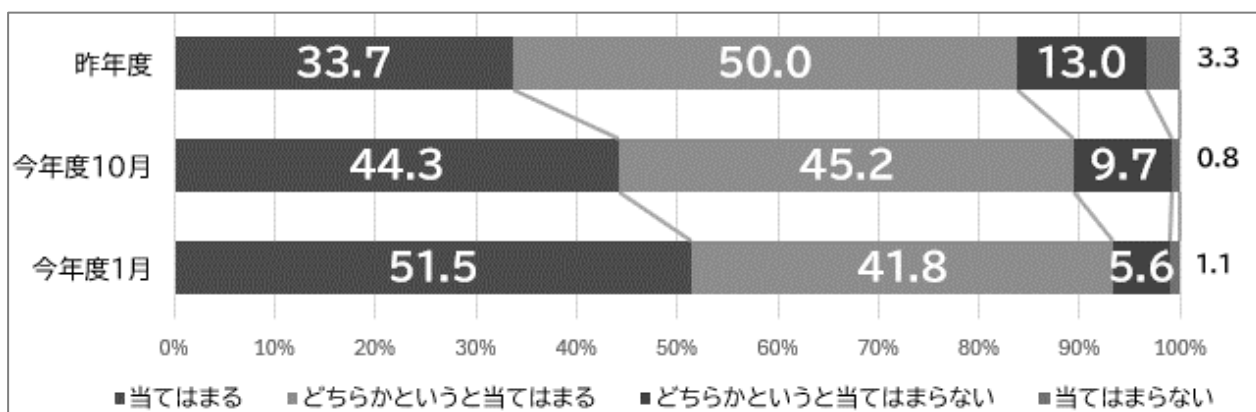


【第2・3学年】 肯定的回答 52.7%→68.1%(15.4ポイント上昇)

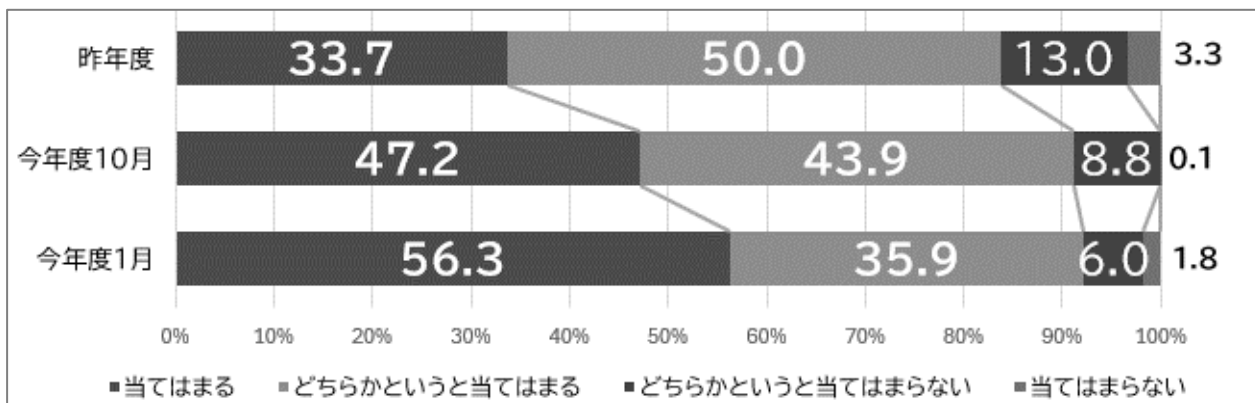


12(4)授業では、他の人と考えを交流しながら課題を解決する活動を行っていると思う。

【第1・2・3学年】 肯定的回答 83.7%→93.3%(9.6ポイント上昇)

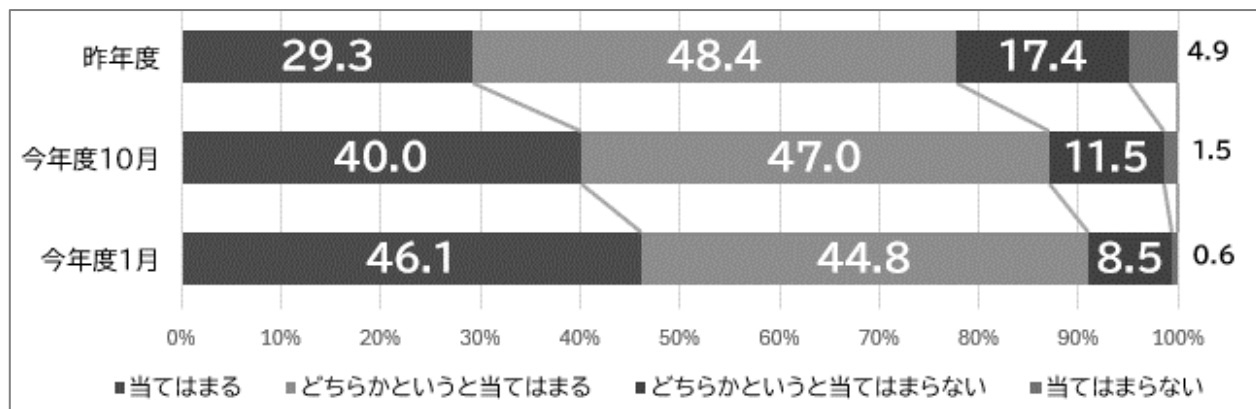


【第2・3学年】 肯定的回答 83.7%→92.2%(8.5ポイント上昇)

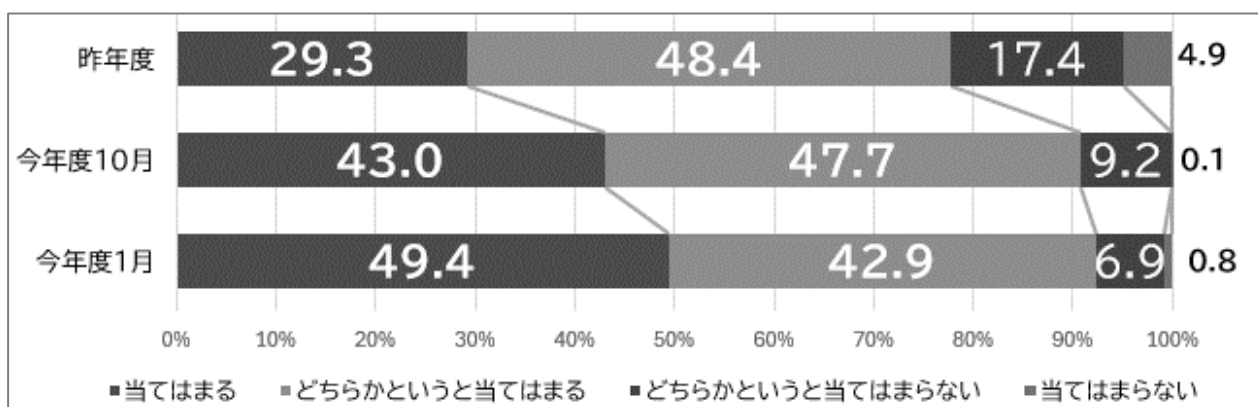


12(5)授業では、自分が理解したことや考えたことを他の人や先生に説明する時間があると思う。

【第1・2・3学年】 肯定的回答 77.7%→90.9%(13.2ポイント上昇)



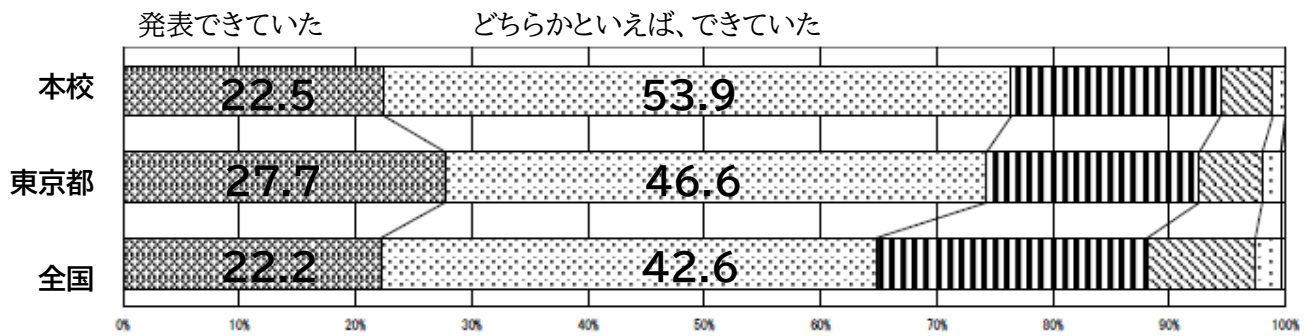
【第2・3学年】 肯定的回答 77.7%→92.3%(14.6ポイント上昇)



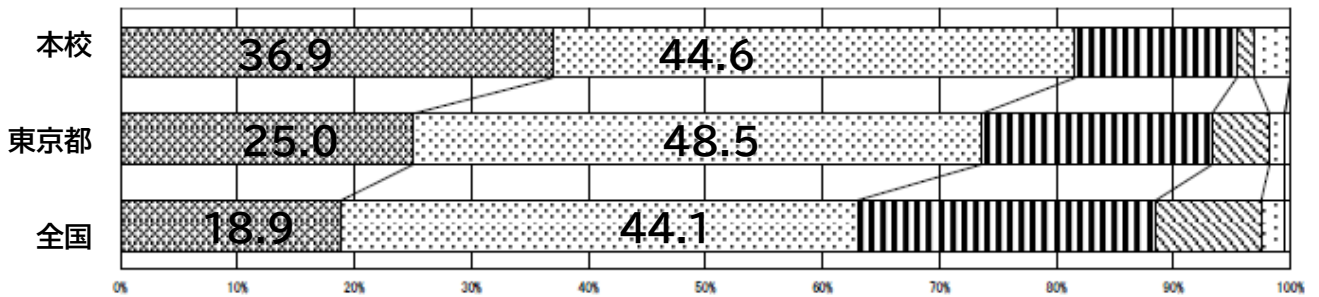
【全国学力・学習状況調査 質問調査 回答結果集計より】 ※質問項目の()内の番号は、令和7年度のもの。

(31)1、2年生のときに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか。

○令和6年度

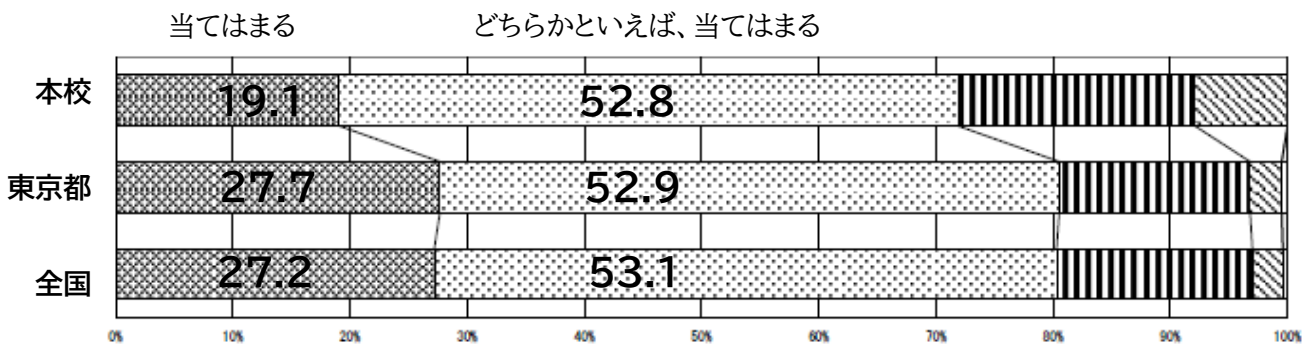


○令和7年度

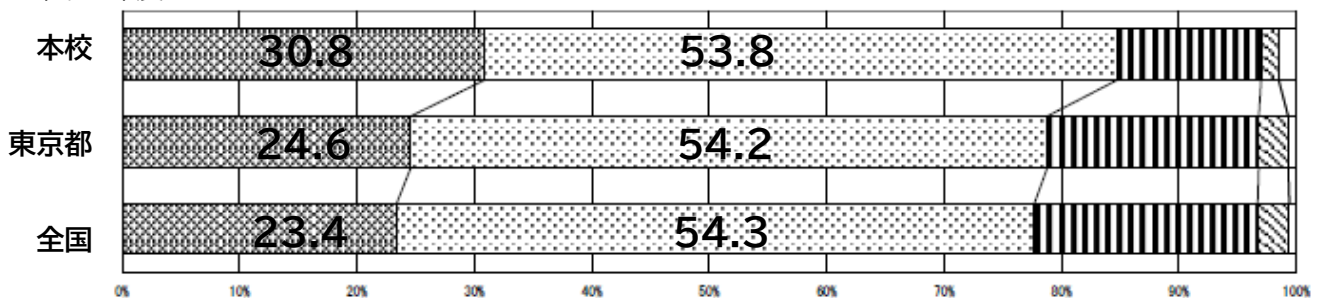


(32)1、2年生のときに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか。

○令和6年度

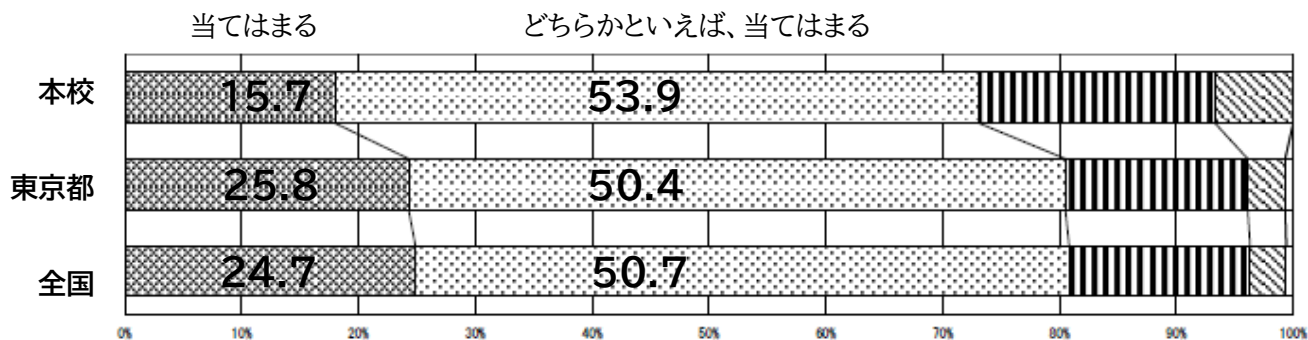


○令和7年度

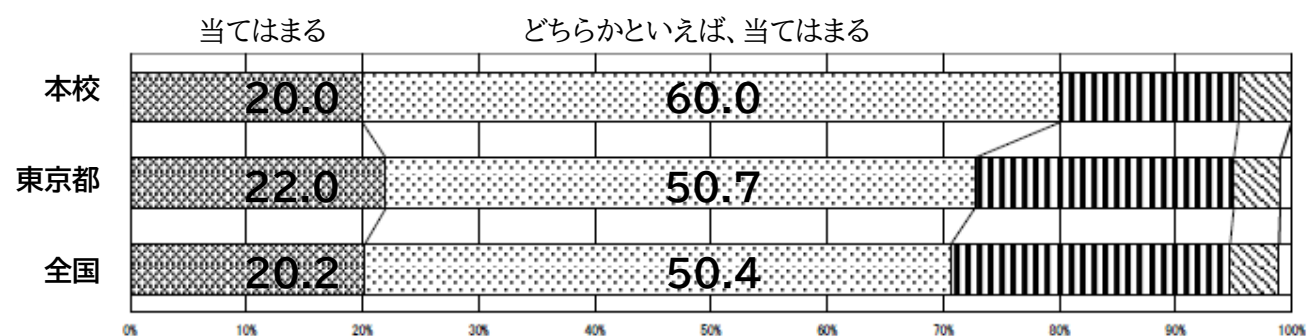


(33)1、2年生のときに受けた授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていましたか。

○令和6年度

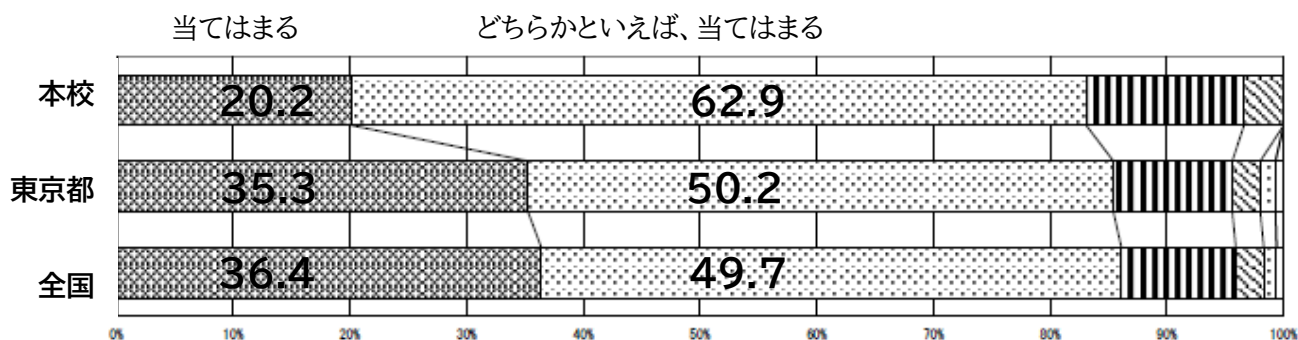


○令和7年度

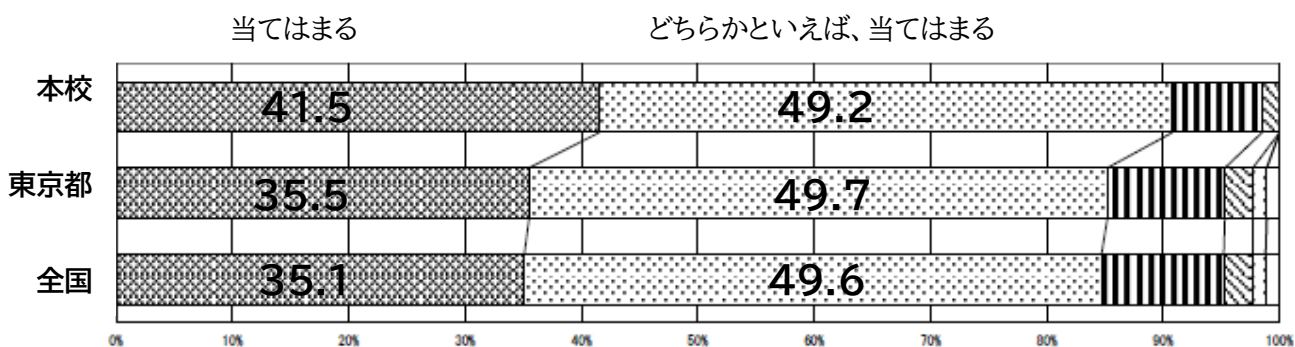


(35)学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか。

○令和6年度



○令和7年度



成果 ○都調査では肯定的回答の数値に若干の増加を認めた。

(要因)

- ・都調査12(4)「授業では、他の人と考えを交流しながら課題を解決する活動を行っていると思う。」12(5)「授業では、自分が理解したことや考えたことを他の人や先生に説明する時間があると思う。」において、9割の生徒が肯定的回答をしていることから、「個→集団→個」の活動が大きく影響したと考えられる。
- ・国調査から、工夫して発表したり、話し合う活動を通じて自分の考えを深めたり、自分の考えをもったりすることに対して意識が向上していることがわかる。授業デザインの一連の流れを全教科で実施したことにより、アウトプットへの意識が向上したと考えられる。

課題 ○「粘り強さ」、「学習の工夫(学習の調整)」の項目に比較して、「アウトプット(対話性)」に対する肯定的数値の増加率が低い。生徒への追跡質問により、自分の考えをもったり、他の人と交流したりすることに対して高い意識をもって臨む生徒が多いが、質問項目の「積極的に他の人や先生に伝えようとしている。」の「積極的」という言葉に引っかかりを感じた生徒がいたことが分かった。。

○国調査「(33)1、2年生のときに受けた授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていましたか」に対する肯定的回答が低い。

→「他教科」との関連を意識しながら、「多様な考えが生まれる問い」を設定する必要がある。

【結論】

○アウトプット(対話性)に対する意識を高める上で、「個→集団→個」の活動の流れが有効であることが確認できた。

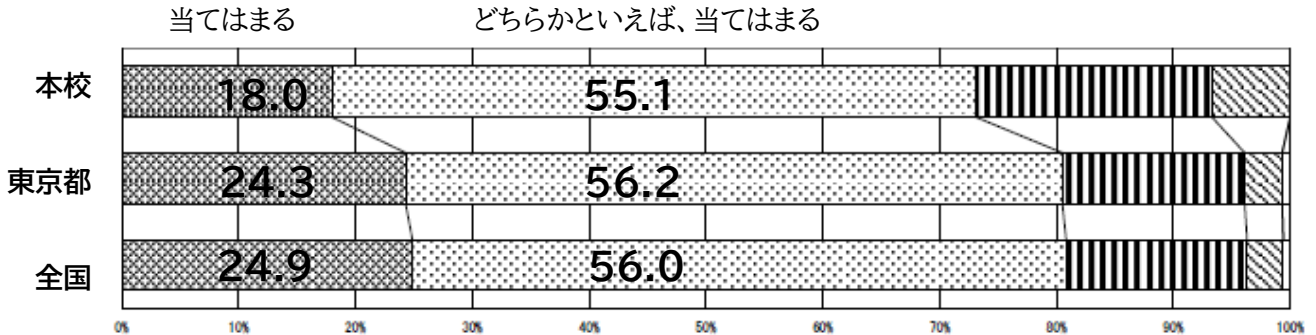
○授業でアウトプットの間が設定されていることへの実感は高いが、交流自体に苦手意識をもつ生徒も少なからずいるため、安心して発言できる場をいかにつくるか、交流活動にいかになれさせていくか、質と回数から考える必要がある。

○他教科と関連させた「多様な考えが生まれる問い」の設定に工夫が必要。

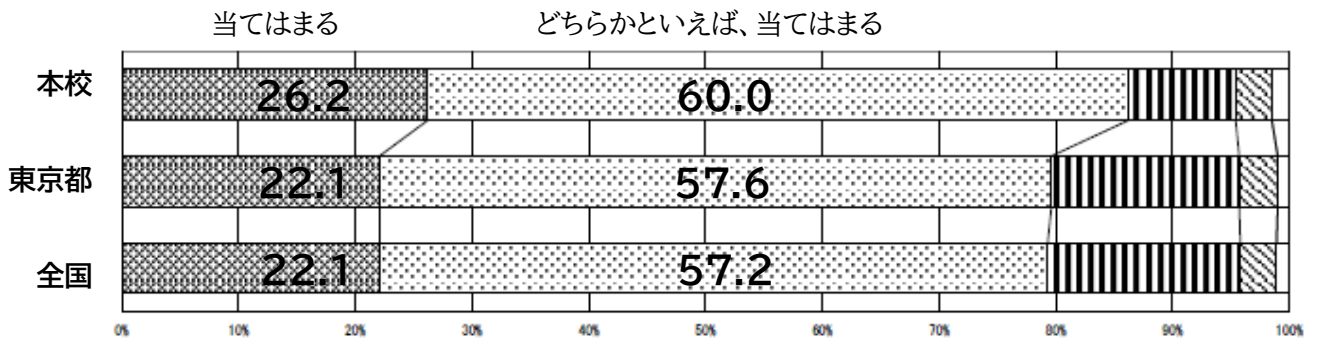
国調査 その他の項目から

【全国学力・学習状況調査 質問調査 回答結果集計より】※質問項目の()内の番号は、令和7年度のもの。
 (34)1、2年生のときに受けた授業は、自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていましたか。

○令和6年度



○令和7年度



【成果】

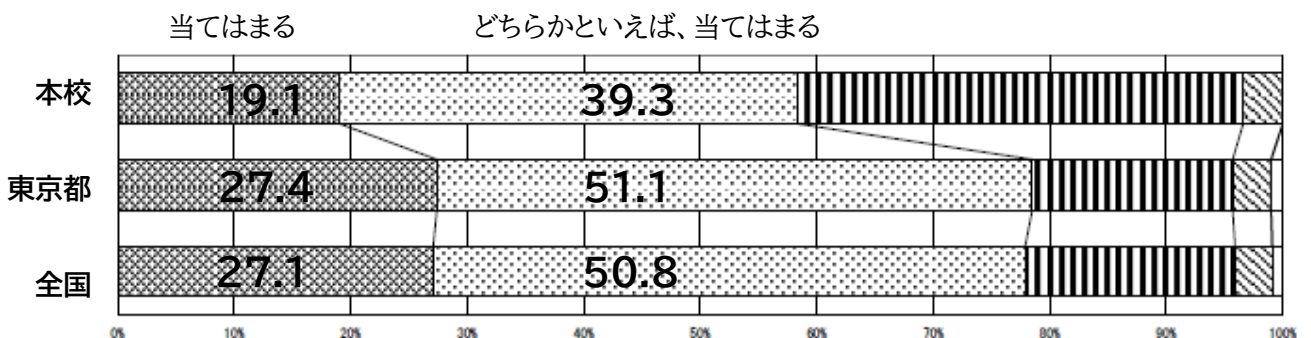
○多様な考えが生まれる「考えさせる問い」を設定し、「個→集団→個」の活動の流れを通して「自分の考え」をもたせる進め方が「自分に合っている」と答えた生徒が86.2%となった。東京都、全国と比較し6.5ポイント上回る結果となった。

【課題】

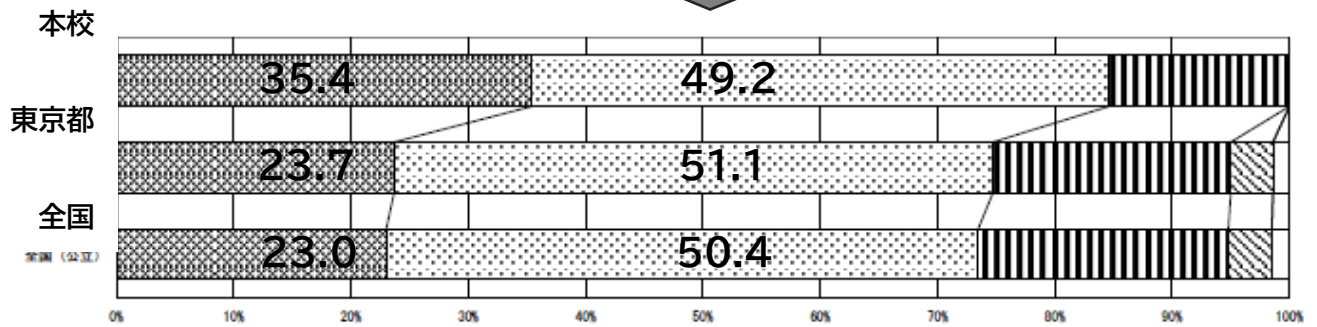
○学習時間も適切であると8割以上の生徒が感じているが、「個→集団→個」の活動には一定の時間の確保が必要である。本校生徒は活動に十分な時間を要するため、1年間の中で、どの単元でこの活動を行うか、計画的に進める必要がある。

(36) 学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか。

○令和6年度



○令和7年度



【成果】

○「分からなかったこと・復習方法」を振り返りとして記述させたことで、教師側は次の授業で確認すべきことが明確になり、生徒も何を復習すべきかが明確になった。

【課題】

○教師が振り返りの確認に追われてしまうため、振り返りを計画的に進める必要がある。→少なくとも「教える」の後、最初の「個」の後に、定着していない生徒のスクリーニングを兼ねて行う必要がある。

学力という側面からみた変容 一国調査・八王子市学力定着度調査の結果より

本校の授業改善は学力向上につなげることができたのか。国調査・八王子市の学力調査結果から検証する。

1. 「全国学力・学習状況調査」の結果

昨年度と今年度とでは、調査を受けた生徒が異なるため、あくまでも参考として分析した。

【平均正答率(国語・数学)】より

平均正答率(国語)	本校	東京都	差	全国	差
昨年度	38.4%	52.1%	-14%	49.3%	-10.9%
今年度	55%	57%	-2%	54.3%	0.7%
平均正答率(数学)	本校	東京都	差	全国	差
昨年度	53%	57%	-4%	52.5%	0.5%
今年度	48%	53%	-5%	48.3%	-0.3%

2. 「八王子市学力定着度調査」の結果

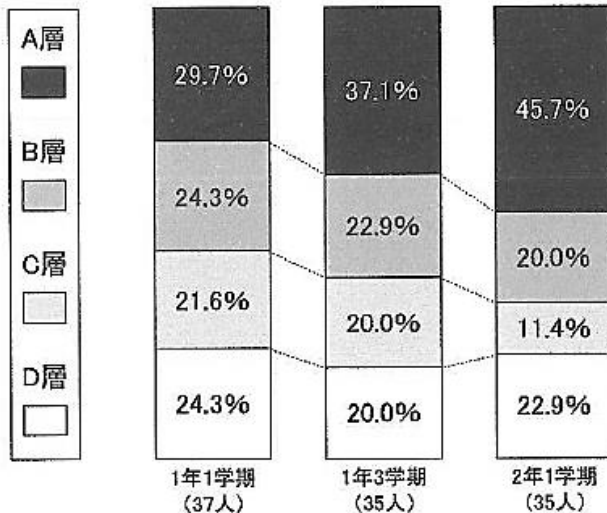
学力層の推移を確認できるデータが、第2学年と第3学年のみとなるため、2学年分のみを紹介する。

●第2学年

【国語】

■ 学力層の推移 (同一母集団比較)

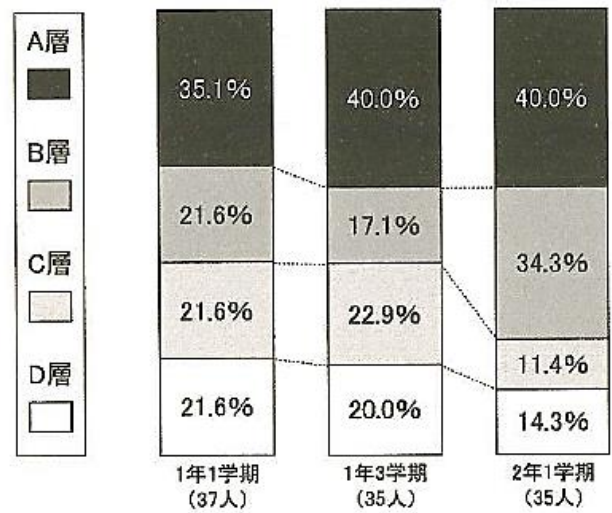
市を母集団とした学力層



【数学】

■ 学力層の推移 (同一母集団比較)

市を母集団とした学力層

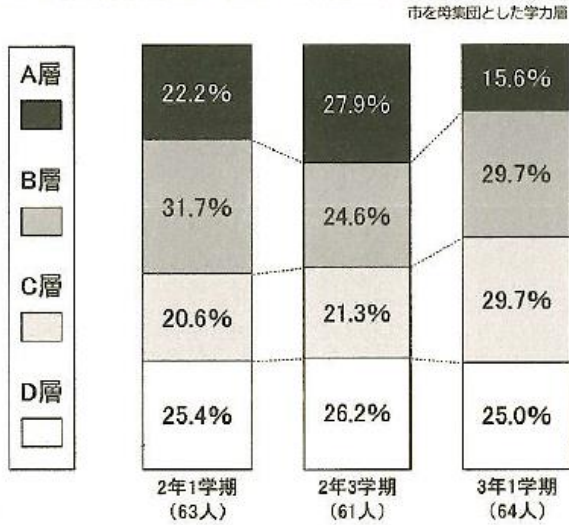


教科	教科総合			基礎			応用		
	貴校	市平均	差	貴校	市平均	差	貴校	市平均	差
国語	79.7	74.7	5.0	81.3	77.4	3.9	70.0	58.8	11.2
数学	70.9	59.6	11.3	75.9	65.4	10.5	50.9	36.7	14.2

●第3学年

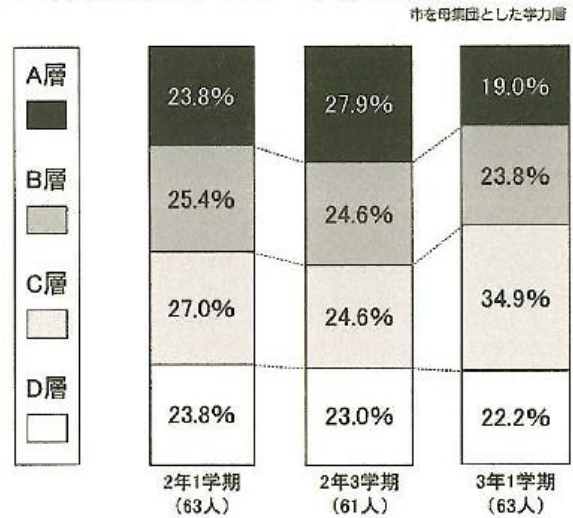
【国語】

■ 学力層の推移（同一母集団比較）



【数学】

■ 学力層の推移（同一母集団比較）



教科	教科総合			基礎			応用		
	貴校	市平均	差	貴校	市平均	差	貴校	市平均	差
国語	64.7	66.3	-1.6	67.6	68.9	-1.3	47.7	50.7	-3.0
数学	51.5	54.9	-3.4	55.2	58.1	-2.9	31.0	36.8	-5.8

【成果】

○「全国学力・学習状況調査」の結果において、令和6年度と比較し、国語に関して平均正答率が全国平均より上回った。今回の「自分の考えをもつ」という授業改善が国語において効果を発揮したと考えられる。調査を受けた生徒が異なること、生徒の実態も異なることは考慮しておきたい。

○「八王子市学力定着度調査」の結果から、第2学年に関しては国語、数学ともに A 層が増え、学力向上が認められた。今回の授業改善の成果が表れていると判断できる。

・WEBQU において、集団の発達段階が第四段階【全体集団成立期】(※)であったことが、今回の研究の「集団」での活動をより活性化させ、学力向上につなげることができた。

※全体集団成立期…学級全体が一定のルールで動き、能動的にフォローシップを発揮できるため、おとなしい生徒もリーダーシップをとれる段階。

【課題】

○第3学年に関しては、第2学年の3学期に向上の兆しが見られたが、第3学年の1学期に再び C 層が増えた。A 層から C 層までの数値に変動が見られたことと WEBQU を関連させると次のことがいえる。

・第3学年は WEBQU において、集団の発達段階が第三段階【中集団成立期】(※)であった。「集団」の活動に対して、互いに配慮できることと積極的に関わることが求められる段階であったことが挙げられる。ただし、第2学年と生徒の実態が異なる部分も大きいので、一概に言えるものではない。

※中集団成立期…特にソーシャルスキル(関わり)の面において、友人に対する配慮のスキルや、友人と積極的・能動的に関わるかかわりのスキルを伸ばす段階。

→このような集団においても、活発に「個→集団→個」の活動をしていく方法について、継続して考えていく必要がある。

研究概要

1. 研究の趣旨

本校は、令和6年度に、東京都教育委員会から「授業改善推進拠点校」として指定を受け、次の趣旨の下に2年間にわたる研究を進めた。

(設置の趣旨)

第1 東京都教育委員会は、児童・生徒の学力向上を図るため、学びに向かう力等に着目し、指導と評価の一体化による授業改善を組織的に推進する取組を実践的に研究・開発し、その成果を全都に普及するための授業改善推進拠点校を設置する。

(東京都教育委員会「授業改善推進拠点校 設置要項」より)

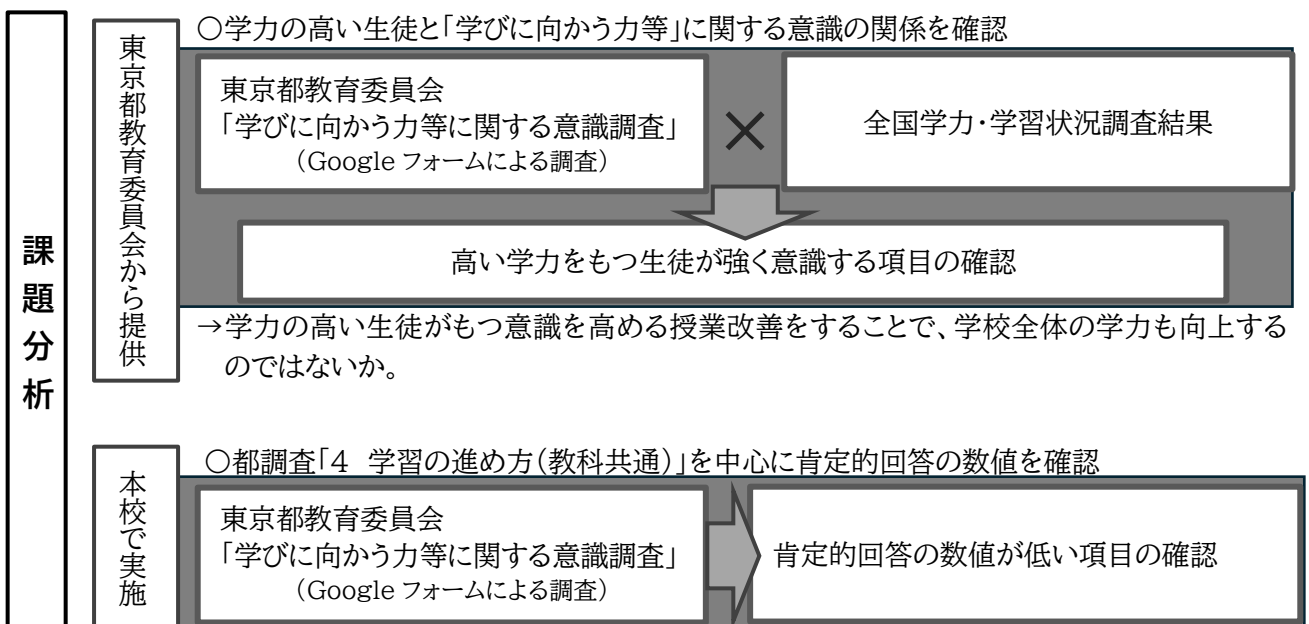
つまりは「学びに向かう力等」に関して、どのような授業改善を進めることが学力向上につながるのか、ということについて研究を進めるものである。

東京都教育委員会からは、「学びに向かう力等」とは一体どのような力を指すものか、生徒のどのような姿が見られることを指すのかが明文化された「学びに向かう力等に関する意識調査(以下、都調査)」(次ページ参照)が提供された。この調査を使って、本校の課題分析と経年変化の見取りを進めた。

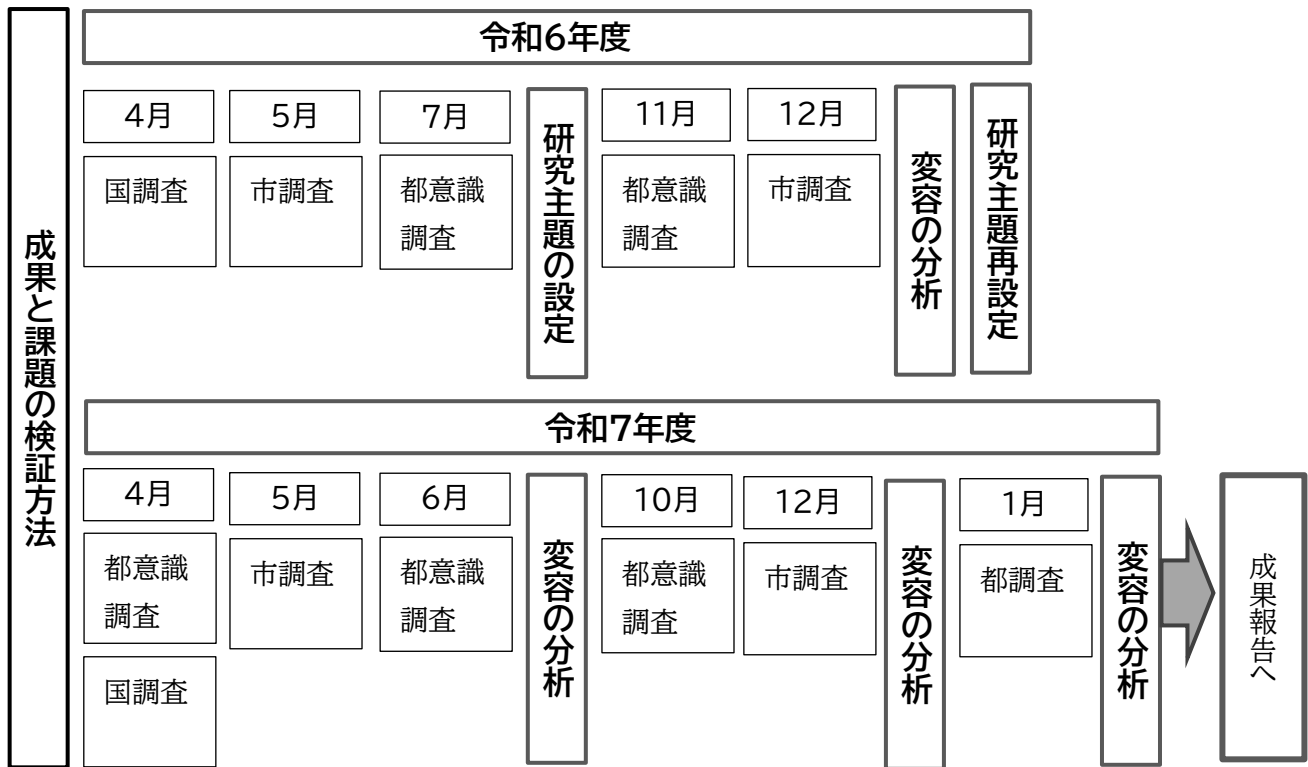
東京都教育委員会の(設置の趣旨)にある「学力向上」の「学力」とは、毎年4月に実施される「全国学力・学習状況調査(以下、国調査とする)」の結果を指すものである。本校で「学びに向かう力等」の課題解決に迫る授業改善が、学力向上にいかに関与できたか、国調査及び八王子市が独自に行っている学力調査(以下、市調査とする)を通して確認した。

2. 研究の方法

次の流れで、課題分析及び成果と課題の検証を進めた。



→今回は、全教科での授業改善を試みるため、特に「教科共通」の項目である「4 学習の進め方」を中心に分析。肯定的回答の数値が低い項目を向上させることで、学力向上につなげることができるのではないか。



3. 本校の実態について

国調査と都調査のクロス分析結果(東京都教育委員会提供)、都調査の結果全体から、本校の実態を把握し、課題を確認した。(都調査項目については11ページ参照)

高い学力をもつ生徒が、どのような意識をもっているかについて(国調査×都調査 クロス分析結果より)

○【国語の正答数×「学びに向かう力等に関する意識調査」との関連が強かった項目(※強かった順に)】

- 4(3)分からないことがあっても、学習を続けるようにしている。
 - 4(2)難しいと感じる問題でも、最後まであきらめずに取り組んでいる。
 - 4(8)テストでまちがえたときは、なぜまちがえたのかを考えている。
 - 4(10)分からないときは、他の人や先生に質問して解決している。
 - 6(3)自分が書いた文章を読み返し、分かりやすい表現になるように書き直している。
 - 6(1)発表や話し合いのときは、話す内容や順序を考えてから話している。
- 粘り強さ

学習の調整

学習の進め方

○【数学の正答数×「学びに向かう力等に関する意識調査」との関連が強かった項目(※強かった順に)】

- 4(3)分からないことがあっても、学習を続けるようにしている。
 - 4(2)難しいと感じる問題でも、最後まであきらめずに取り組んでいる。
 - 4(8)テストでまちがえたときは、なぜまちがえたのかを考えている。
 - 4(14)どうしてそうなるのかという理由を考えながら学習している。
 - 9(2)分かっていることと求めることを考えて問題に取り組んでいる。
 - 8(1)数学で学習する言葉や公式は、見なくても言えるようにしている。
 - 8(2)数学で学習する言葉や公式の意味を理解しようとしている。
 - 9(5)まちがえた文章問題は、どこでまちがえたのかを考えている。
 - 7(3)まちがえた計算問題は、どこでまちがえたのかを考えている。
 - 8(3)数学で学習した言葉を使って自分の考え方を説明している。
- 粘り強さ

学習の調整

学習の進め方

○【国語・数学の共通点】

「粘り強さ」と「学習の調整」に関して、以下の項目において、共に高い関連性があることを確認した。

4(3)分からないことがあっても、学習を続けるようにしている。

4(2)難しいと感じる問題でも、最後まであきらめずに取り組んでいる。

4(8)テストでまちがえたときは、なぜまちがえたのかを考えている。

粘り強さ

学習の調整



これらの結果を踏まえ、次のとおり整理した。

○高い学力をもつ生徒ほど「あきらめずに学び続ける姿勢」をもち、「まちがえた理由を考えること」ができる。

(東京都教育委員会 令和6年度 後期(9月)訪問資料「国調査×都調査」クロス分析結果 より抜粋)

参考:(国語の正答数)×(「学びに向かう力等に関する意識調査」)

	A	B
1		国正答数
2	4(8)テストでまちがえたときは、なぜまちがえたのかを考えている。	0.443508
3	4(3)分からないことがあっても、学習を続けるようにしている。	0.433748
4	9(2)分かっていることと求めることを考えて問題に取り組んでいる。	0.426415
5	1(合計)各教科の授業の内容に対する理解の程度	0.425091
6	9(合計)学習の進め方(数学〈文章問題〉)	0.424705
7	1(5)英語の授業の内容はどのくらい分かりますか。	0.423881
8	6(3)自分が書いた文章を読み返し、分かりやすい表現になるように書き直している。	0.381568
9	4(合計)学習の進め方(教科共通)	0.390889
10	9(5)まちがえた文章問題は、どこでまちがえたのかを考えている。	0.384763
11	4(2)難しいと感じる問題でも、最後まであきらめずに取り組んでいる。	0.382225
12	8(3)数学で学習した言葉を使って自分の考え方を説明している。	0.380659
13	12(合計)学習指導の工夫	0.378653
14	4(10)分からないときは、他の人や先生に質問して解決している。	0.377704
15	8(合計)学習の進め方(数学〈用語・公式〉)	0.376557
16	6(1)発表や話し合いのときは、話す内容や順序を考えてから話している。	0.372852

自らの学習を調整しようとする側面

粘り強い取組を行おうとする側面

国語の学習の進め方

参考:(数学の正答数)×(「学びに向かう力等に関する意識調査」)

	A	B
1		数正答数
2	8(合計)学習の進め方(数学〈用語・公式〉)	0.530457
3	4(3)分からないことがあっても、学習を続けるようにしている。	0.512597
4	2(3)数学の学習はどのくらい得意ですか。	0.512126
5	1(合計)各教科の授業の内容に対する理解の程度	0.499607
6	9(2)分かっていることと求めることを考えて問題に取り組んでいる。	0.498584
7	9(合計)学習の進め方(数学〈文章問題〉)	0.494386
8	8(1)数学で学習する言葉や公式は、見ないでも言えるようにしている。	0.484129
9	4(8)テストでまちがえたときは、なぜまちがえたのかを考えている。	0.473638
10	1(3)数学の授業の内容はどのくらい分かりますか。	0.465065
11	8(2)数学で学習する言葉や公式の意味を理解しようとしている。	0.458106
12	9(5)まちがえた文章問題は、どこでまちがえたのかを考えている。	0.457509
13	4(14)どうしてそうなるのかという理由を考えながら学習している。	0.456654
14	4(合計)学習の進め方(教科共通)	0.453573
15	7(3)まちがえた計算問題は、どこでまちがえたのかを考えている。	0.450671
16	8(3)数学で学習した言葉を使って自分の考え方を説明している。	0.426938
17	4(2)難しいと感じる問題でも、最後まであきらめずに取り組んでいる。	0.425548

粘り強い取組を行おうとする側面

自らの学習を調整しようとする側面

数学の学習の進め方

都調査より特に肯定的回答の数値が低かった項目について

○特に「4 学習の進め方(教科共通)」を通して肯定的回答の数値が低かった項目を確認

- 4(1)確実にできるようになるまで、繰り返し練習している。 (肯定的回答:62.0%)
- 4(2)難しいと感じる問題でも、最後まであきらめずに取り組んでいる。 (肯定的回答:60.9%)
- 4(5)どうやったらうまくいくかを考えてから学習を始めるようにしている。 (肯定的回答:60.9%)
- 4(7)学習をしてもできるようにならないときは、学習の方法を工夫している。 (肯定的回答:63.6%)
- 4(11)自分が考えたことを、積極的に他の人や先生に伝えようとしている。 (肯定的回答:52.7%)

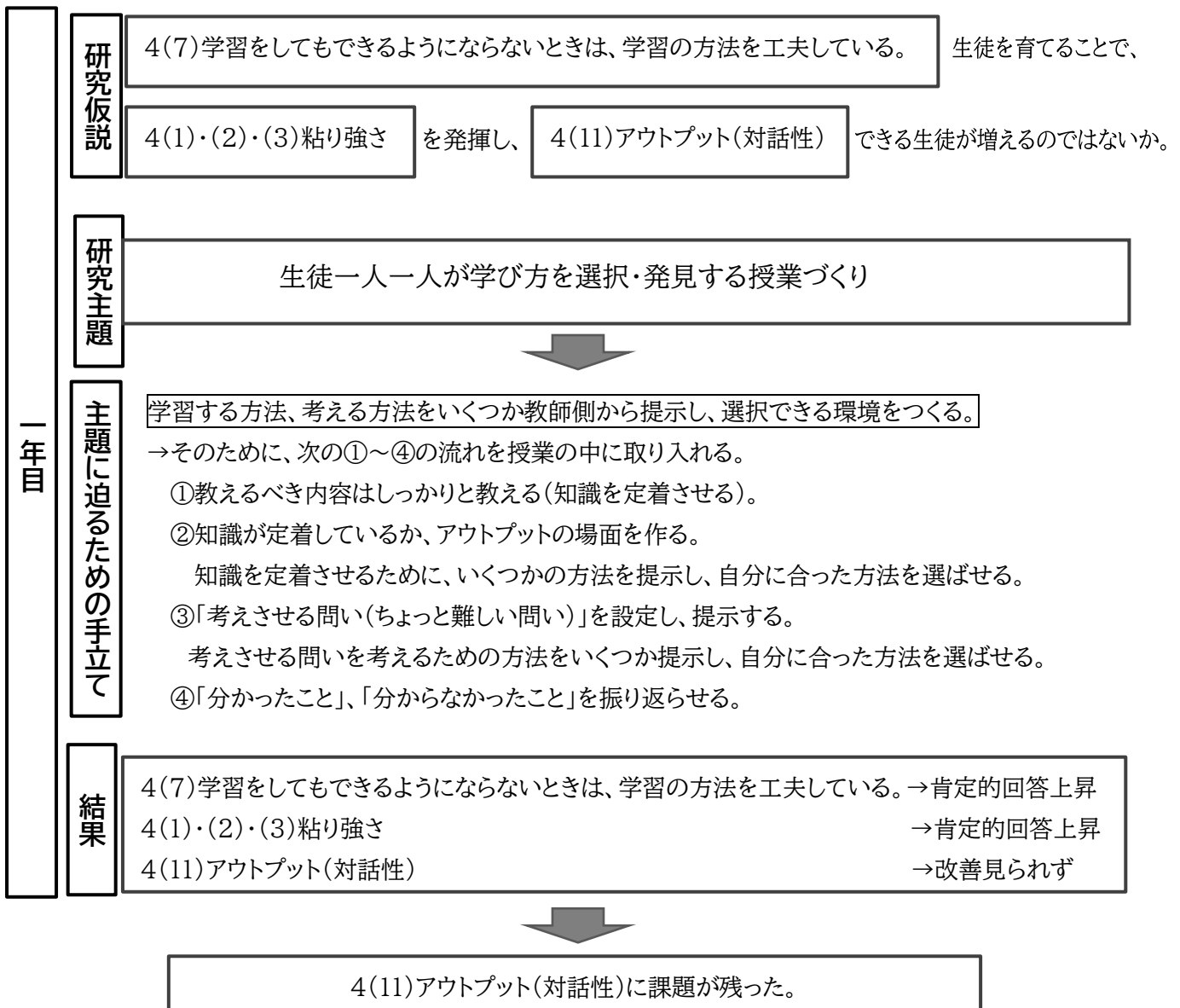


これらの結果を踏まえ、次のとおり整理した。

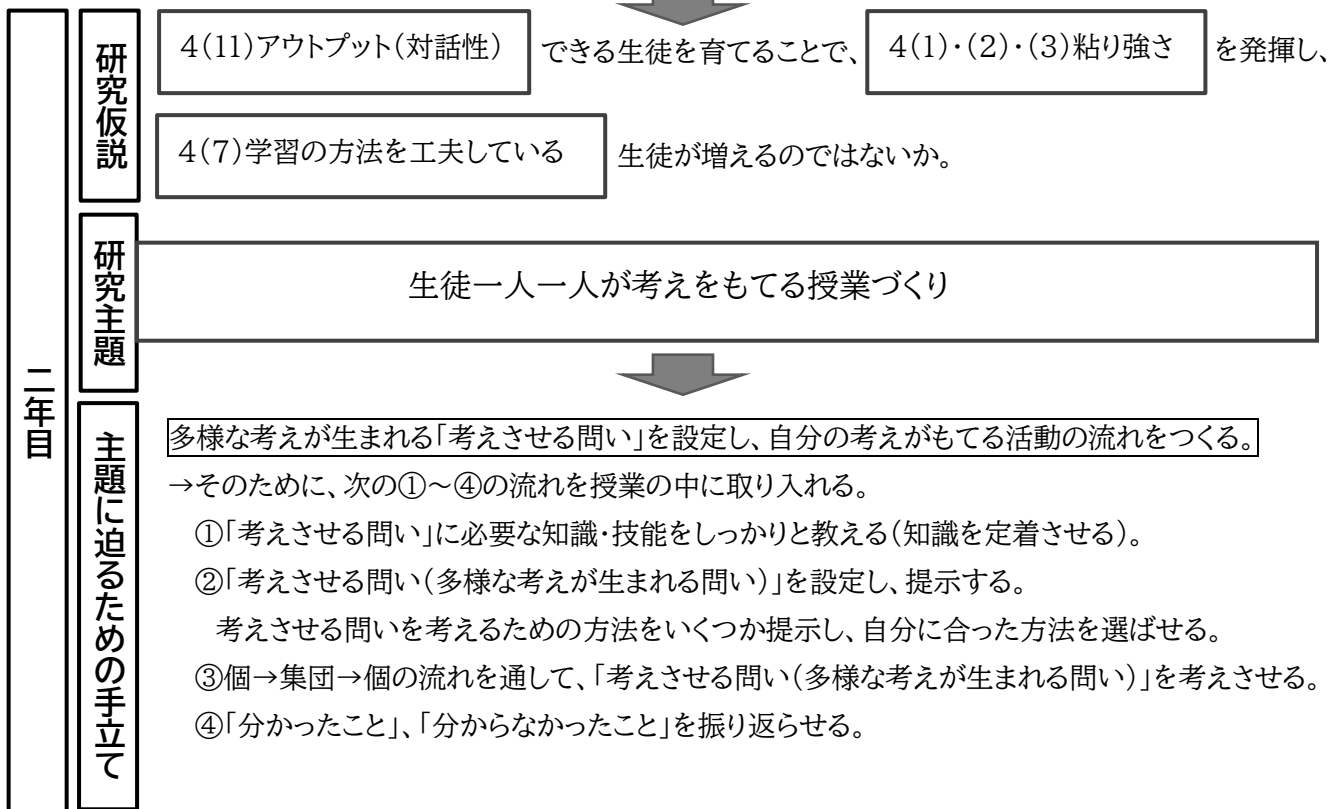
- 高い学力をもつ生徒が意識している項目4(2)に対する肯定的回答が低い。粘り強く取り組める生徒が少ない。
- 粘り強く取り組めないのは、学習の方法を知らないからではないか(学習の方法を工夫できない)。
- 自分の考えがもてない、他の人に伝えられないのは、学習の方法を工夫できないからではないか。

4. 本校の研究主題について

調査結果を踏まえ、本校では次のとおり仮説を立て、研究主題を構築した。



東京女子体育大学名誉教授 田中洋一先生をお迎えし、研究の再検討を行う。



5. 2年目の研究主題に迫るための手立てを実現するにあたって

次の5点を通して、主題に迫るための手立てを実現できるよう、環境を整備した。

- ①「自分の考えをもつための全教科共通の授業デザイン」を構築し、1人1回以上授業を実践する。
- ②自主学習を促す仕組みをつくり、一人ひとりが「自分の考え」をしっかりともてるようにする。
- ③「集団」の活動がより円滑に活発になるよう、WEBQU を使った学習席を作成する。
- ④「上柚木学習スタンダード」を作成し、教師・生徒共に意識を高める。
- ⑤2回の三者面談時に、都意識調査結果を「個票」として配布し、自らの学習習慣を振り返る機会を設定する。

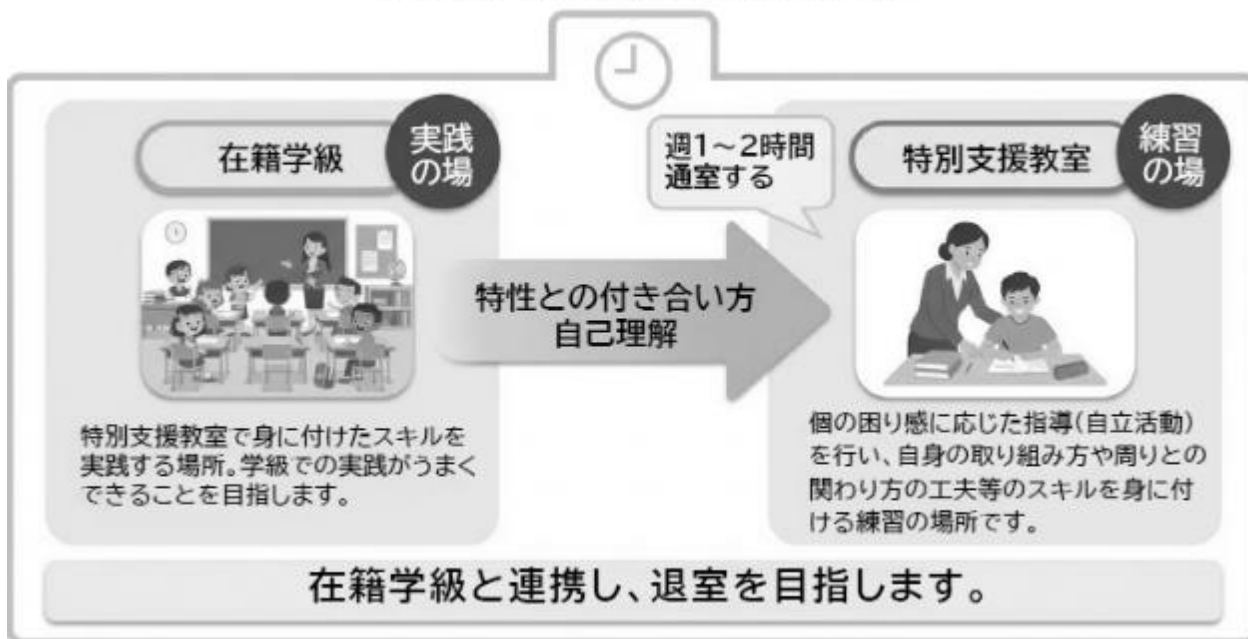
特別支援教室における研究の役割

1. 特別支援教室(通級)とは

特別支援教室は、在籍学級と連携し、同じ校舎の中で在籍学級と特別支援教室を行き来しながら、週に1～2時間を使って自分の特性に向き合い自己理解や対処の仕方を身に付ける場である。

在籍学級は実践の場、特別支援教室は練習の場と位置付けている。

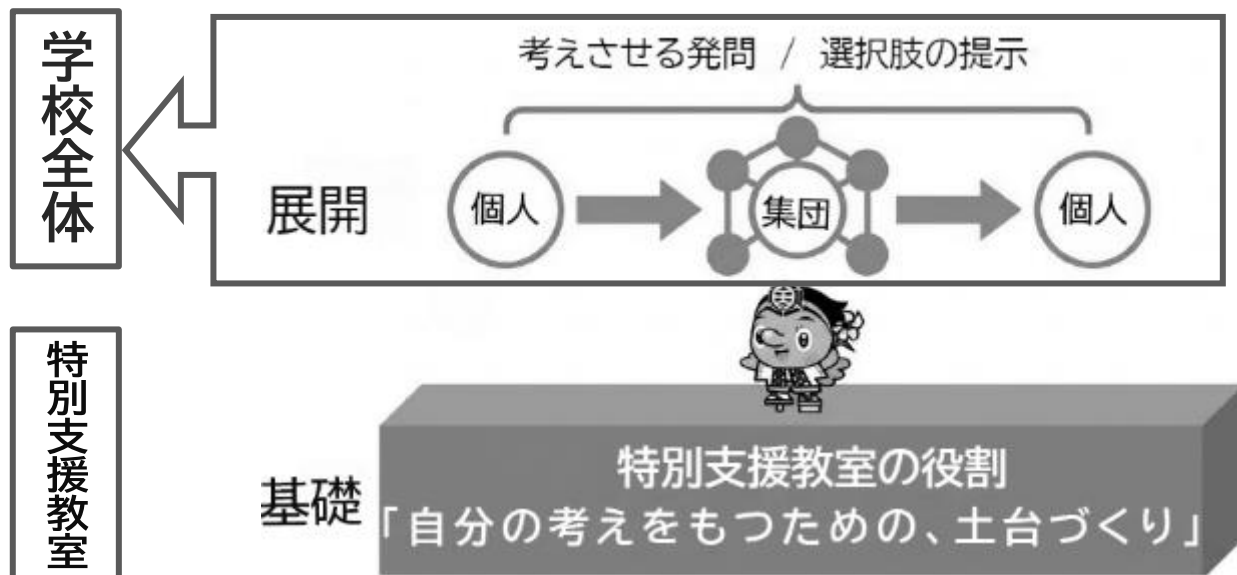
特別支援教室(通級)の全体図



2. 特別支援教室(通級)における研究の役割

特別支援教室には、不安が強くて考える余裕がない、言い表せる言葉をもっていない、出来事や題材を整理できない、指示を丁寧に理解できない、集中の仕方が分からないなど、考えるための土台が整っていない生徒が多く在籍している。

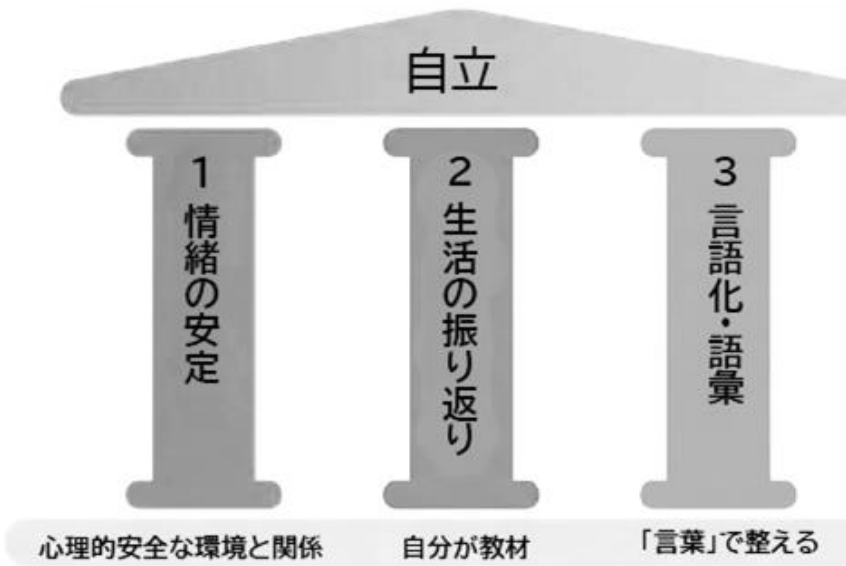
学校全体の研究では「自分の考えをもたせる」授業づくりが進められたが、特別支援教室では、まず「考えられる状態」、つまりは研究の土台を整えることが必要であると考えた。



3. 土台づくりを支える「三本柱」

次の3つの視点から土台づくりを実践した。

「自分の考えをもつ」ための土台



1 情緒の安定

- 安心して考え始められる環境づくりをする。
- 否定しない関わりをもつ。

自己調整の場の保障へ

2 振り返りの充実

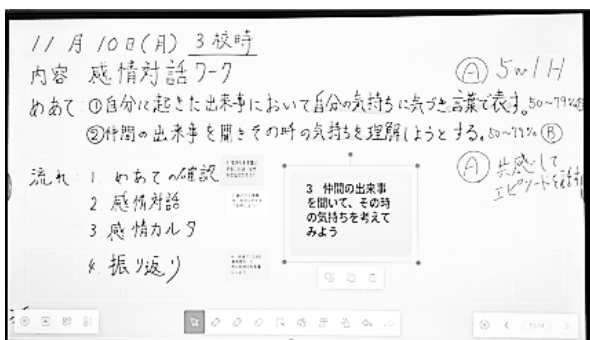
- 生活そのものを教材にする。
- 「いつ・どこで・誰が」の視点から出来事を整理する。

自分を俯瞰する練習に

3 言語化・語彙

- 語彙の量を増やす。
- 言葉の意味を確認し、意味のずれを整える。

行動につながる表現へ



←特別支援教室においても、「めあて」「流れ」「振り返り」の掲示を共通デザインとして取り入れている。



↑小集団授業で用いた教材。



↑小集団授業の様子。